「送別會は面白いぜ、出て見玉へ。今日は大いに飲む積りだ」

「勝手に飲むがいゝ。おれは肴を食つたらすぐ歸る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。成程江戸つ子の輕跳な風を、よく、あらはしてる」

「何でもいゝ、送別會へ行く前に一寸おれのうちへ御寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれは此間から、うらなり君の顏を見る度に氣の毒で堪らなかつたが、愈送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出來る事なら、おれが代りに行つてやりたい樣な氣がしだした。それで送別會の席上で、大いに演說でもして其行を盛にしてやりたいと思ふのだが、おれのべらんめえ調子ぢや、到底物にならないから、大きな聲を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒膽を挫いでやらうと考へ附いたから、わざ〳〵山嵐を呼んだのである。

おれは先づ冒頭としてマドンナ事件から說き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つて居る。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐が君は誰を捕まへても馬鹿呼ばはりをする。今日學校で自分の事を馬鹿と云つたぢやないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿ぢやない。自分は赤シャツの同類ぢやないと主張した。夫ぢや赤シャツは

腑抜の呆助だと云つたら、さうかも知れないと山嵐は大いに贊成した。山嵐は强い事は强いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知つて居ない。會津つぽなんてものはみんな、こんなものなんだらう。

夫から增給事件と將來重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふゝんと鼻から聲を出して、それぢや僕を免職する考へだなと云つた。免職する積りだつて、君は免職になる氣かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツも一所に免職させてやると大いに威張つた。どうして一所に免職させる氣かと押して尋ねたら、そこはまだ考へて居ないと答へた。山嵐は强さうだが、智慧はあまりなささうだ。おれが增給を斷つたと話したら、大將大きに喜んで流石江戸つ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつてゐるなら、何故留任の運動をしてやらなかつたと聞いて見たら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつて仕舞つて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判して見たが、どうする事も出來なかつたと話した。夫に就いても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、斷然斷るか、一應考へて見ますと逃げればいゝのに、あの辯舌に胡魔化されて、卽席に許諾したものだから、あとから御母さんが泣きついても、自分が談判

に行つても役に立たなかつたと非常に殘念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだらうとおれが云つたら、無論さうに違ひない。あいつは大人しい顏をして、惡事を働いて、人が何か云ふと、ちやんと逃道を拵へて待つてるんだから、餘つ程奸物だ。あんな奴にかゝつては鐵拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつて見せた。おれは序だから、君の腕は強さうだな柔術でもやるかと聞いて見た。すると大將二の腕へ力瘤を入れて、一寸攫んで見ろと云ふから、指の先で揉んで見たら、何の事はない湯屋にある輕石の樣なものだ。

おれは餘り感心したから、君その位の腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだらうと聞いたら、無論さと云ひながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻轉する。頗る愉快だ。山嵐の證明する所によると、かんじん綯りを二本より合はせて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるさうだ。かんじんよりなら、おれにも出來さうだと云つたら、出來るものか、出來るならやつて見ろと來た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合はせた。

君どうだ、今夜の送別會に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勸めて見たら、山嵐はさうだなと考へて居たが、今夜はまあよさうと云つた。何故と聞くと、今夜は古賀に氣の毒だから——それにどうせ撲る位なら、あいつらの惡い所を見屆けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるからと、分別のありさうな事を附加した。山嵐でもおれよりは考へがあると見える。

ぢや演說をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸つ子のべら〳〵になつて重みがなくていけない。さうして、きまつた所へ出ると、急に溜飮が起こつて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて來て言葉が出ないから、君に讓るからと云つたら、妙な病氣だな、ぢや君は人中ぢや口は利けないんだね、困るだらう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答へて置いた。

さうかうするうち時間が來たから、山嵐と一所に會場へ行く。會場は花晨亭と云つて、當地で第一等の料理屋ださうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買ひ入れて、其儘開業したと云ふ話だが、成程見懸けからして嚴めしい構だ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織を縫ひ直して、胴着にする樣なものだ。

二人が着いた頃には、人數ももう大概揃つて、五十疊の廣間に二つ三つ人間の塊まりが出來て居る。五十疊丈に床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五疊敷の床とは比較にならない。

尺を取つて見たら二間あつた。右の方に赤い模様のある瀬戸物の瓶を据ゑて其中に松の大きな枝が插してある。松の枝を插して何にする氣か知らないが、何ケ月立つても散る氣遣ひがないから、錢が懸からなくつて、よからう。あの瀬戸物はどこで出來るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物ぢやありません、伊萬里ですと云つた。伊萬里だつて瀬戸物ぢやないかと、云つたら、博物はえへゝゝと笑つて居た。あとで聞いて見たら、瀬戸で出來る燒物だから、瀬戸と云ふのださうだ。おれは江戸つ子だから、陶器の事を瀬戸物といふのかと思つて居た。床の眞中に大きな懸物があつて、おれの顏位な大きさな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味いから、漢學の先生に、なぜあんなまづいものを麗々と懸けて置くんですと尋ねた所、先生があれは海屋と云つて有名な書家のかいた物だと敎へてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つて居る。

やがて書記の川村がどうか御着席をと云ふから、柱があつて靠りかゝるのに都合のいゝ所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は今日の主人公だと云ふのでうらなり先生、是も日本服で控へて居る。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だつたから、すぐ胡坐をかいた。隣の體操教師は黒すぼんで、ちやんとかしこまつて居る。體操の教師丈にいやに修業が積んで居る。やがて御膳が出る。德利が竝ぶ。幹事が立つて、一言開會の辭を述べる。夫から狸が立つ、赤シャツが起つ。悉く送別の辭を述べたが、三人共申し合はせた樣にうらなり君の、良敎師で、好人物な事を吹聽して、今回去られるのは洵に殘念である、學校としてのみならず、個人として大いに惜しむ所であるが、御一身上の御都合で切に轉任を御希望になつたのだから致し方がないと云ふ意味を述べた。こんな嘘をついて送別會を開いて、それでちつとも恥づかしいとも思つて居ない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。此良友を失ふのは實に自分に取つて大なる不幸であると迄云つた。しかも其いひ方がいかにも尤もらしくつて、例のやさしい聲を一層やさしくして述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でも屹度だまされるに極まつてる。マドンナも大方此手で引つ掛けたんだらう。赤シャツが送別の辭を述べ立ててゐる最中、向う側に坐つて居た山嵐がおれの顏を見て一寸稻光をさした。おれは返電として人指し指でべつかんこうをして見せた。

赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がつたから、おれは嬉しかつたので、思はず手をぱちゝゝと拍つた。すると狸を始め一同が悉くおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云ふかと思ふと只今校長始めことに敎頭は古賀君の轉任を非常に殘念がられたが、私

は少々反對で古賀君が一日も早く當地を去られるのを希望して居ります。延岡は僻遠の地で、當地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代樸直の氣風を帶びて居るさうである。心にもない御世辭を振り蒔いたり、美しい顏をして君子を陷れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き溫良篤厚の士は必ず其地方一般の歡迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君の爲に此轉任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、其地の淑女にして、君子の好逑となるべき資格あるものを擇んで一日も早く圓滿なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なる御轉婆を事實の上において慚死せしめん事を希望します。えへん〳〵と二つばかり大きな咳拂ひをして席に着いた。おれは今度も手を叩かうと思つたが、又みんながおれの面を見るといやだから、やめにして置いた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生は御丁寧に、自席から、座敷の端の末座迄行つて、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ參る事になりましたに就いて、諸先生方が小生の爲に此の盛大なる送別會を御開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪へぬ次第で——殊に只今は校長、教頭其他諸君の送別の辭を頂戴して、大いに難有く服膺する譯であります。私は是から遠方へ參りますが、何卒從前の通り御見捨なく御愛顧の程を願ひます。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆ど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされてゐる校長や、教頭に恭しく御禮を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの樣子や、あの言葉つきや、あの顏つきから云ふと、心から感謝してゐるらしい。こんな聖人に眞面目に御禮を云はれたら、氣の毒になつて、赤面しさうなものだが狸も赤シヤツも眞面目に謹聽して居る計りだ。

挨拶が濟んだら、あちらでもチユーと云ふ音がする。おれも眞似をして汁を飮んで見たがまづいもんだ。口取に蒲鉾はついてるが、どす黑くて竹輪の出來損ひである。刺身も竝んでるが、厚くつて鮪の切身を生で食ふと同じ事だ。それでも隣近所の連中はむしや〳〵旨さうに食つて居る。大方江戶前の料理を食つた事がないんだらう。

其うち燗德利が頻繁に往來し始めたら、四方が急に賑やかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃を頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に獻酬をして、一巡周る積りと見える。甚だ御苦勞である。うらなり君がおれの前へ來て、一つ頂戴致しませうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にずぼんの儘かしこまつて、一盃差し上げた。折角參つて、すぐ御別れになるのは殘念ですね。御出立はいつです、是非濱迄御見送りをしませうと云つたら、うらなり

君はいえ御用多の所決して夫には及びませんと答へた。うらなり君が何と云つたつて、おれは學校を休んで送る氣で居る。

夫から一時間程するうちに席上は大分亂れて來る。まあ一杯、おや僕が飲めと云ふのに……などと呂律の巡りかねるのも一人二人出來て來た。少々退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めて居ると山嵐が來た。どうだ最前の演説はうまかつたらう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所氣に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陷れる樣なハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は云つたらう」

「うん」

「ハイカラ野郎丈では不足だよ」

「ぢや何と云ふんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫つ被りの、香具師の、モヽンガーの、岡つ引きの、わん〳〵鳴けば犬も同然な奴とでも云ふがいゝ」

「おれには、さう舌は廻らない。君は能辯だ。第一單語を大變澤山知つてる。それで演説が出來ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩のときに使はうと思つて、用心の爲に取つて置く言葉さ。演説となつちや、かうは出ない」

「さうかな、然しぺら〳〵出るぜ。もう一遍やつて見給へ」

「何遍でもやるさ、いゝか。――ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の……」

と云ひかけて居ると、緣側をどたばた云はして、二人ばかり、よろ〳〵しながら馳け出して來た。

「兩君そりやひどい、――逃げるなんて、――僕が居るうちは決して逃がさない、さあのみ玉へ。――いかさま師……面白い、いかさま面白い。――さあ飲み玉へ」

とおれと山嵐をぐい〳〵引つ張つて行く。實は此兩人共便所に來たのだが、醉つてるもんだから、便所へ這入るのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。醉つ拂ひは目の中る所へ用事を拵へて、前の事はすぐ忘れて仕舞ふんだらう。

「さあ、諸君いかさま師を引つ張つて來た。さあ飲ましてくれ玉へ。いかさま師をうんと云ふ程、醉はしてくれ玉へ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際へ壓し附けた。諸方を見廻して見ると、膳の上に滿足な肴の乘つて

居るのは一つもない。自分の分を綺麗に食ひ盡して、五六間先へ遠征に出た奴も居る。校長はいつ歸つたか姿が見えない。

所へ御座敷はこちら？と藝者が三四人這入つて來た。おれも少し驚いたが、壁際へ押し附けられて居るんだから、凝として只見て居た。すると今迄床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢さうに啣へて居た、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかゝつた。向うから這入つて來た藝者の一人が、行き違ひながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番綺麗な奴だ。遠くて聞こえなかつたが、おや今晩は位云つたらしい。赤シャツは知らん顏をして出て行つたぎり、顏を出さなかつた。大方校長のあとを追つ懸けて歸つたんだらう。

藝者が來たら座敷中急に陽氣になつて、一同が關の聲を揚げて歡迎したのかと思ふ位、騷々しい。さうして或奴はなんこを攫む。その聲の大きな事、丸で居合抜の稽古の樣だ。こつちでは拳を打つてる。よつ、はつ、と夢中で兩手を振る所は、ダーク一座の操り人形より餘つ程上手だ。向うの隅ではおい御酌だ、と德利を振つて見て、酒だ〳〵と言ひ直して居る。どうも八釜しくて騷々しくつて堪らない。其うちで手持無沙汰に下を向いて考へ込んでるのはうらなり君計りである。自分の爲に送別會を開いてくれたのは、自分の轉任を惜しんでくれるんぢやない。みんなが酒を呑んで遊ぶ爲だ。自分獨りが手持無沙汰で苦しむ爲だ。こんな送別會なら開いてもらはない方が餘程ましだ。

しばらくしたら銘々胴間聲を出して何か唄ひ始めた。おれの前へ來た一人の藝者が、あんた、なんぞ唄ひなはれ、と三味線を抱へたから、おれは唄はない、貴樣唄つて見ろと云つたら、鉦や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちやんちきりん、叩いて廻つて逢はれるものならば、わたしなんぞも、どんどこ、どんのちやんちきりんと叩いて廻つて逢ひたい人がある、と二息にうたつて、おゝしんどと云つた。おゝしんどなら、もつと樂なものをやればいゝのに。

すると、いつの間にか傍へ來て坐つた、野だが、鈴ちやん逢ひたい人に逢つたと思つたら、すぐ御歸りで、御氣の毒さま見た樣でげすと相變らず噺し家見た樣な言葉使ひをする。知りまへんと藝者はつんと澄ました。野だは頓着なくたま〳〵逢ひは逢ひながら……と、いやな聲を出して義太夫の眞似をやる。おきなはれと藝者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてる。此藝者は赤シャツに挨拶をした奴だ。藝者に叩かれて笑ふなんて、野だも御目出度い者だ。鈴ちやん僕が紀伊の國を踊るから、一つ彈いて頂戴と云ひ出した。野だは此上まだ踊る氣で居る。

向うの方で漢學の御爺さんが歯のない口を歪めて、そりや聞こえません傳兵衞さん、お前とわたしのその中は……と迄は無事に濟ましたが、それから？と藝者に聞いて居る。爺さんなんて物覺えのわるいものだ。一人が博物を捕まへて、近頃こないなのが、でけましたぜ、彈いて見まほうか。よう聞いて居なはれや——花月卷、白いリボンのハイカラ頭、乘るは自轉車彈くはヴイオリン、半可の英語でぺら〳〵と、I am glad to see you と唄ふと、博物は成程面白い、英語入りだねと感心して居る。

山嵐は馬鹿に大きな聲を出して、藝者、藝者と呼んで、おれが劍舞をやるから、三味線を彈けと號令を下した。藝者はあまり亂暴な聲なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構はず、ステッキを持つて來て、踏破千山萬岳烟と眞中へ出て、獨りで隱し藝を演じて居る。所へ野だが既に紀伊の國を濟まして、かつぽれを濟まして、棚の達磨さんを濟まして、丸裸の越中褌一つになつて、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで氣狂だ。

おれはさつきから苦しさうに袴も脫がず控へて居るうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別會だつて、越中褌の裸踊迄羽織袴で我慢して見て居る必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう歸りませうと退去を勸めて見た。するとうらなり君は今日は私の送別會だから、私が先へ歸つては失禮です、どうぞ御遠慮なくと動く氣色もない。なに構ふもんですか、送別會なら、送別會らしくするがいゝです、あの樣を御覽なさい氣狂會です、さあ行きませうと、進まないのを無理に勸めて、座敷を出かゝる所へ、野だが箒を振り〳〵進行して來て、や御主人が先へ歸るとはひどい。日清談判だ。歸せないと箒を橫にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癪が起こつて居る所だから、日清談判なら貴樣はちやん〳〵だらうと、いきなり拳骨で、野だの頭をぽかりと喰はしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を拔かれた體で、ぼんやりして居たが、おや是はひどい。御撲ちになつたのは情ない。この吉川を御打擲とは恐れ入つた。愈以て日清談判だ。とわからぬ事をならべて居る所へ、うしろから山嵐が何か騷動が始まつたと見て取つて、劍舞をやめて、飛んで來たが、此ていたらくを見て、いきなり頸筋をうんと攫んで引き戻した。日清……いたい。いたい。どうも是は亂暴だと振りもがく所を橫に捩つたら、すとんと倒れた。あとはどうなつたか知らない。途中でうらなり君に別れて、うちへ歸つたら十一時過ぎだつた。

十

祝勝會で學校は御休みだ。練兵場で式があると云ふので、狸は生徒を引率して參列しなくてはならない。おれも職員の一人として一所にくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしい位である。學校の生徒は八百人もあるのだから、體操の教師が隊伍を整へて、一組一組の間を少しづゝ明けてそれへ職員が一人か二人宛監督として割り込む仕掛である。仕掛だけは頗る巧妙なものだが、實際は頗る不手際である。生徒は子供の上に、生意氣で、規律を破らなくつては生徒の體面にかゝはると思つてる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと譯もないのに鬨の聲を揚げたり、丸で浪人が町内をねり歩いてる樣なものだ。軍歌も鬨の聲も揚げない時はがや〳〵何か喋舌つてる。喋舌らないでも歩行けさうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云つたつて聞きつこない。喋舌るのも只喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあ是ならよからうと思つて居た。所が實際は大違ひである。下宿の婆さんの言葉を借りて云へば、正に大違ひの勘五郎である。生

徒があやまつたのは心から後悔してあやまつたのではない。只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭計りさげて、狡い事をやめないと一般で生徒も謝罪丈はするが、いたづらは決してやめるものでない。よく考へて見ると世の中はみんな此生徒の樣なものから成立して居るかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、眞面目に受けて勘辨するのは正直過ぎる馬鹿と云ふんだらう。あやまるのも假りにあやまるので、勘辨するのも假りに勘辨するのだと思つてれば差し支へはない。本當にあやまらせる氣なら、本當に後悔する迄叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間に這入つて行くと、天麩羅だの、團子だの、と云ふ聲が絶えずする。而も大勢だから、誰が云ふのだか分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんぢやありません、團子と申したのぢやありません、それは先生が神經衰弱だから、ひがんでさう聞くんだ位云ふに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から養成した、此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教へてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この眞似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言ひ拔けられる樣な手段で、おれの顔を汚すのを拋つて置く、糞清一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だつて、

子供だつて、づう體はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくては義理がわるい。所がこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆捩ぢを食はして來る。貴樣がわるいからだと云ふと、初手から逃げ路が作つてある事だから、滔々と辯じ立てる。辯じ立てて置いて、自分の方を表向き丈立派にして夫から、こつちの非を攻撃する。もと〳〵、返報にした事だから、こちらの辯護は向うの非が擧がらない上は辯護にならない。つまりは向うから手を出して置いて、世間體はこつちが仕掛けた喧嘩の樣に、見做されて仕舞ふ。大變な不利益だ。夫なら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んで居れば、向うは益〳〵増長する計り、大きく云へば世の中の爲にならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用ひて捕まへられないで、手の附け樣のない返報をしなくてはならなくなる。さうなつては江戸つ子も駄目だ。駄目だが一年もかゝやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でも左樣ならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ歸つて淸と一所になるに限る。こんな田舍に居るのは墮落しに來て居る樣なものだ。新聞配達をしたつて、こゝへ迄墮落するよりはましだ。

かう考へて、いや〳〵、附いてくると、何だか先鋒が急にがや〳〵騒ぎ出した。同時に列はびたりと留まる。變だから、列を右へはづして、向うを見ると、大手町を突き當たつて藥師町へ曲がる角の所で、行き詰まつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉み合つて居る。前方から靜かに靜かにと聲を嗄らして來た體操教師に何ですと聞くと、曲り角で中學校と師範學校が衝突したんだと云ふ。

中學と師範とはどこの縣下でも犬と猿の樣に仲がわるいさうだ。なぜだかわからないが、丸で氣風が合はない。何かあると喧嘩をする。大方狹い田舍で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだらう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳け出して行つた。すると前の方にゐる連中は、しきりに何だ地方稅の癖に、引き込めと、怒鳴つてる。後からは押せ押せと大きな聲を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくゞり拔けて、曲り角へもう少しで出ようとした時に、前へ！と云ふ高く鋭い號令が聞こえたと思つたら師範學校の方は肅々として進行を始めた。先を爭つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中學校が一步を讓つたのである。資格から云ふと師範學校の方が上ださうだ。

祝勝の式は頗る簡單なものであつた。旅團長が祝詞を讀む、知事が祝詞を讀む。參列者が萬歳を唱へる。それで御仕舞ひだ。餘興は午後にあると云ふ話だから、一先づ下宿へ歸つて、此間から、氣に掛かつてゐた、淸への返事を書きかけた。今度はもつと詳しく書いてくれとの注文だか

ら、可成念入に認めなくつちやならない。然しいざとなつて、半切を取り上げると、書く事は澤山あるが、何から書き出していゝか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭い。これにしようか、是は詰まらない。何か、すら〳〵と出て、骨が折れなくつて、さうして清が面白がる樣なものはないかしらん、と考へて見ると、そんな注文通りの事件は一つもなささうだ。おれは墨を磨つて、筆をしめして、巻紙を睨めて、——巻紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作を同じ樣に何返も繰り返したあと、おれにはとても手紙はかけるものではないと、諦めて硯の蓋をして仕舞つた。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。矢つ張り東京迄出掛けて行つて、逢つて話しをする方が簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙をかくのは三七日の斷食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を拋り出して、ごろりと轉がつて肱枕をして庭の方を睨めて見たが、矢つ張り清の事が氣にかゝる。其時おれはかう思つた。かうして遠くへ來て迄、清の身の上を案じてゐてやりさへすれば、おれの眞心は清に通じるに違ひない。通じさへすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮らしてると思つてるだらう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起こつた時にやりさへすればいゝ譯だ。

庭は十坪程の平庭で、是と云ふ植木もない、只一本の蜜柑があつて、塀のそとから、目標になる程高い。おれはうちへ歸ると、いつでも此蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つてゐる所は頗る珍しいものだ。あの青い實が段々熟してきて、黄色になるんだらうが、定めて綺麗だらう。今でも最う半分色の變つたのがある。婆さんに聞いて見ると、頗る水氣の多い、旨い蜜柑ださうだ。今に熟れたら、たんと召し上がれと云つたから、毎日少し宛食つてやらう。もう三週間もしたら、充分食へるだらう。まさか三週間内に此所を去る事もなからう。

おれが蜜柑のことを考へて居るところへ、偶然山嵐が話しにやつて來た。今日は祝勝會だから、君と一所に御馳走を食はうと思つて牛肉を買つて來たと、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の眞中へ拋り出した。おれは下宿で芋責め豆腐責めになつてる上、蕎麥屋行き、團子屋行きを禁じられてる際だから、そついは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかゝつた。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが藝者に馴染のある事を知つてるかと聞くから、知つてるとも、此間うらなりの送別會の時に來た一人がさうだらうと云つたら、さうだ僕は此頃漸く勘づいたのに、君は中々敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯樂だのと云ふ癖に、裏へ廻つて、藝者と關係なんかつけとる、怪しからん奴だ。夫もほかの人が遊ぶのを寛容するならいゝが、君が蕎麥屋へ行つたり、團子屋へ這入るのさへ取締上害になると云つて、校長の口を通じて注意を加へたぢやないか」

「うん、あの野郎の考へぢや藝者買ひは精神的娯樂で、天麩羅や、團子は物質的娯樂なんだらう。精神的娯樂なら、もつと大べらにやるがいゝ。何だあの樣は。馴染の藝者が這入つてくると、入れ代りに席をはづして逃げるなんて、どこ迄も人を胡魔化す氣だから氣に食はない。さうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文學だとか、俳句が新體詩の兄弟分だとか云つて、人を烟にまく積りなんだ。あんな弱蟲は男ぢやないよ。全く御殿女中の生れ變りか何かだぜ。こゝによると、彼奴のおやぢは湯島のかげまかも知れない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そこの所はまだ養えて居ないぜ。そんなのを食ふと條蟲が湧くぜ」

「さうか、大抵大丈夫だらう。それで赤シャツは人に隱れて、溫泉の町の角屋へ行つて、藝者と會見するさうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこます爲には彼奴が藝者をつれて、あすこへ這入り込む所を見届けて置いて面詰するんだね」

「見届けるつて、夜番でもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋と云ふ宿屋があるだらう。あの表二階をかりて障子へ穴をあけて見て居るのさ」

「見て居るときに來るかい」

「來るだらう。どうせ一晩ぢやいけない。二週間許りやる積りでなくつちや」

「隨分疲れるぜ。僕あおやぢの死ぬとき一週間許り徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱つた事がある」

「少し位身體が疲れたつて構はんさ、あんな奸物をあの儘にして置くと、日本の爲にならないから、僕が天に代つて誅戮を加へるんだ」

「愉快だ。さう事が極まれば、おれも加勢してやる。夫で今夜から夜番をやるのかい」

「まだ机屋に懸け合つてないから、今夜は駄目だ」

「それぢやいつから始める積りだい」

「近々のうちにやるさ。いづれ君に報知をするから、さうしたら加勢して呉れ給へ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくると是で中々すばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談して居ると、宿の婆さんが出て來て學校の生徒さんが一人、堀田先生に御目にかゝりたいてゝ御出でたぞなもし。今御宅へ參じたのぢやが、御留守ぢやけれ、大方こゝぢやらうてゝ捜し當てて御出でたのぢやがなもしと闥の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はさうですかと玄關迄出て行つたが、やがて歸つて來て、君、生徒が祝勝會の餘興を見に行かないかつて誘ひに來たんだ。今日は高知から何とか踊をしに、わざわざこゝ迄多人數乘り込んで來てゐるのだから、是見見物しろ滅多に見られない踊だと云ふんだ、君も一所に行つて見給へと山嵐は大いに乘り氣で、おれに同行を勸める。おれは踊なら東京で澤山見て居る。毎年八幡樣の御祭には屋臺が町内へ廻つてくるんだから汐酌でも何でもちやんと心得て居る。土佐つぽの馬鹿踊なんか見たくもないと思つたけれども、折角山嵐が勸めるもんだから、つい行く氣になつて門へ出た。山嵐を誘ひに來たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。

妙な奴が來たもんだ。

會場へ這入ると回向院の相撲か本門寺の御會式の樣に幾旒となく長い旗を所々に植ゑ附けた上に、世界萬國の國旗を悉く借りて來た位、繩から繩、綱から綱へ渡しかけて、大きな空がいつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞臺を設けて、こゝで所謂高知の何とか踊をやるんださうだ。舞臺を右へ半町許りをくると葭簀の圍ひをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めて居るが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、脊蟲の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞臺とは反對の方面で、頻りに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝國萬歳とかいてある。天主の松の上をふは〳〵飛んで營所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして黒い圓子がしゆつと秋の空を射拔く樣に揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟が傘の骨の樣に開いて、だら〳〵と空中に流れ込んだ。風船がまた上がつた。今度は陸海軍萬歳と赤地に白く染め拔いた奴が風に搖られて、溫泉の町から相生村の方へ飛んでいつた。大方觀音樣の境内へでも落ちたらう。

式の時は左程でもなかつたが、今度は大變な人出だ。田舍にもこんなに人間が住んでるかと驚

いた位うぢや〳〵して居る。利口な顔はあまり見當たらないが、數から云ふと慥かに馬鹿に出來ない。其うち評判の高知の何とか踊が始まつて居たが、是は大間違ひであつた。

いかめしい後鉢巻をして、立つ附け袴を穿いた男が十人許り宛、舞臺の上に三列に竝んで、其三十人が悉く拔き身を携げて居るには魂消た。前列と後列の間は僅か一尺五寸位だらう、左右の間隔は夫より短かいとも長くはない。たつた一人列を離れて舞臺の端に立つてるのがある計りだ。此仲間外れの男は袴丈はつけて居るが、後鉢巻は儉約して、拔き身の代りに、胸へ太鼓を懸けて居る。太鼓は太神樂の太鼓と同じ物だ。此男がやがて、いやあ、はあゝと呑氣な聲を出して、妙な謠をうたひながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河萬歳と普陀洛やの合併したものと思へば大した間違ひにはならない。

歌は頗る悠長なもので、夏分の水飴の樣に、だらしがないが、句切りをとる爲にぼこぼんを入れるから、のべつの樣でも拍子は取れる。此拍子に應じて三十人の拔き身がぴか〳〵と光るのだが、是は又頗る迅速な御手際で、拜見して居ても冷々する。隣も後も一尺五寸以内に生きた人間が居て、其人間が又切れる拔き身を自分と同じ樣に振り舞はすのだから、餘程調子が揃はなければ、同志撃ちを始めて怪我をする事になる。夫も動かないで刀丈前後とか上下とかに振るのなら、まだ危險もないが、三十人が一度に足踏をして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣のものが一秒でも早過ぎるか遲過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣の頭はそがれるかも知れない。拔き身の動くのは自由自在だが、其動く範圍は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、中々以て汐酌や關の戸の及ぶ所でない。聞いて見ると、是は甚だ熟練の入るもので容易な事では、かう云ふ風に調子が合はないさうだ。ことに六づかしいのは、かの萬歳節のぼこぼん先生ださうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、悉くこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのださうだ。傍で見て居ると、此大將が一番呑氣さうに、いやあ、はあゝと氣樂にうたつてるが、其實は甚だ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまり此踊を餘念なく見物して居ると、半町許り、向うの方で急にわつと云ふ鬨の聲がして、今迄穩やかに諸所を縱覽して居た連中が、俄かに波を打つて、右左に搖ぎ始める。喧嘩だ喧嘩だと云ふ聲がすると思ふと、人の袖を潛り拔けて來た、赤シャツの弟が、先生又喧嘩です、中學の方で、今朝の意趣返しをするんで、又師範の奴と決戰を始めた所です、早く

來て下さいと云ひながら又人の波のなかへ潛り込んでどつかへ行つて仕舞つた。

山嵐は世話の燒ける小僧だ又始めたのか、いゝ加減にすればいゝのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見て居る譯にも行かないから取り鎭める積りだらう。おれは無論の事逃げる氣はない。山嵐の踵をふんであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が眞最中である。師範の方は五六十人もあらうか、中學は慥かに三割方多い。師範は制服をつけてゐるが、中學は式後大抵は日本服に着換へてゐるから、敵味方はすぐわかる。然し入り亂れて組んづ、解れつ戰つてるから、どこから、どう手を附けて引き分けていゝか分らない。山嵐は困つたなと云ふ風で、暫らく此の亂雜な有樣を眺めて居たが、かうなつちや仕方がない。巡査がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云ふから、おれは返事もしないでいきなり一番喧嘩の烈しさうな所へ躍り込んだ。止せ〳〵そんな亂暴をすると學校の體面に關はる。よさないかと、出る丈の聲を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、中々さう旨くは行かない。一二間這入つたら、出る事も引く事も出來なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中學生と組み合つてゐる。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持つて、無理に引き分けようとする途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握つた肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の中へ乘つた奴がある。兩手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乘つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がつて見ると、三間許り向うに山嵐の大きな身體が生徒の間に挾まりながら、止せ〳〵、喧嘩は止せ〳〵と揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つて見たが聞こえないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで來た石が、いきなりおれの頰骨へ中つたなと思つたら、後からも、背中を棒でどやした奴がある。敎師の癖に出て居る、打て打てと云ふ聲がする。敎師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を拋げろ。と云ふ聲もする。おれは、なに生意氣な事をぬかすな、田舍者の癖にと、いきなり傍に居た師範生の頭を張りつけてやつた。石が又ひゆうと來る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後の方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。かうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめに這入つたんだがどやされたり、石をなげられたりして恐れ入つて引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修業を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり張り飛ばされたりして居ると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ〳〵と云ふ聲がした。今迄葛練りの中で泳いでる樣に身動きも出來なかつたのが、急に樂になつたと思つたら、敵も味方も一度に引き上げて仕舞つた。田舍者でも退却は巧

妙だ。クロバトキンより旨い位である。

山嵐はどうしたかと見ると、紋附の一重羽織をずた〳〵にして、向うの方で鼻を拭いて居る。鼻柱をなぐられて大分出血したんださうだ。鼻がふくれ上がつて眞赤になつて頗る見苦しい。おれは飛白の袷を着て居たから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織程な損害はない。然し頗ぺたがびり〳〵して堪らない。山嵐は大分血が出て居るぜと教へてくれた。

巡査は十五六名來たのだが、生徒は反對の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐丈である。おれらは姓名をつげて、一部始終を話したら、とも角も警察迄來いと云ふから警察へ行つて署長の前で事の顚末を述べて下宿へ歸つた。

十一

あくる日眼が覺めて見ると身體中痛くて堪らない。久しく喧嘩をしつけなかつたからこんなに答へるんだらう。これぢやあんまり自慢も出來ないと床の中で考へて居ると、婆さんが四國新聞を持つて來て枕元へ置いてくれた。實は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕樣があるものかと無理に腹這ひになつて、寐ながら、二頁を開けて見ると、驚いた。昨日の喧嘩がちやんと出て居る。喧嘩の出て居るのは驚かないのだが、中學の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意氣なる某とが、順良なる生徒を使嗾して、此騷動を喚起せるのみならず、兩人は現場にあつて生徒を指揮したる上漫りに師範生に向つて暴行を擅にしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本縣の中學は昔時より善良溫順の氣風を以て全國の羨望する所なりしが、輕薄なる二豎子の爲に吾校の特權を毀損せられて、此不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つて其責任を問はざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に當局者は相當の處分を此無賴漢の上に加へて彼等をして再び教育界に足を入るゝ餘地なからしむる事を。さうして一字毎にみんな黑點を加へて、御灸を据ゑた積りで居る。おれは床の中で、糞でも喰らへと云ひながら、むつくり飛び起きた。不思議な事に今迄身體の關節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れた樣に輕くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ拋げつけたが、まだ氣に入らなかつたから、わざ〳〵後架へ持つて行つて棄てて來た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺を吹くと云つて、新聞程の法螺吹きはあるまい。おれの云つて然る可き事をみんな向うで並べて居やがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云ふ名前の人があるか。考へて見ろ。是で

も歴然とした姓もあり名もあるんだ。系圖が見たけりや多田滿仲以來の先祖を一人殘らず拜ましてやらあ。——顏を洗つたら、頬ぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞を御見たかなもしと聞く。讀んで後架へ棄てて來た。欲しけりや拾つて來いと云つたら、驚いて引き下がつた。鏡で顏を見ると昨日と同じ樣に傷がついてゐる。是でも大事な顏だ、顏へ傷まで附けられた上へ、生意氣なる某などと某呼ばはりをされゝば澤山だ。

今日の新聞に辟易して學校を休んだ抔と云はれちや一生の名折れだから、飯を食つていの一番に出頭した。出てくる奴も、出て來る奴もおれの顏を見て笑つてゐる。何が可笑しいんだ。貴樣達にこしらへて貰つた顏ぢやあるまいし。其うち、野だが出て來て、いや昨日は御手柄で、——名譽の御負傷でげすか、と送別會の時に撲つた返報と心得たのか、いやに冷かしたから、餘計な事を言はずに繪筆でも舐めて居ろと云つてやつた。するとこりや恐れ入りやした。然し嘸御痛い事でげせうと云ふから、痛からうが痛くなからうがおれの面だ。貴樣の世話になるもんかと怒鳴りつけてやつたら、向う側の自席へ着いて矢つ張りおれの顏を見て隣の歷史の教師と何か內所話をして笑つてゐる。

夫から山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、紫色に膨脹して、掘つたら中から膿が出さうに見える。自惚の所爲か、おれの顏より餘つ程手ひどく遣られてゐる。おれと山嵐は机を並べて、隣同志の近しい仲で、御負けに其机が部屋の戸口から眞正面にあるんだから運がわるい。妙な顏が二つ塊まつてゐる。ほかの奴は退屈にさへなると屹度此方ばかり見る。飛んだ事でと口で云ふが、心のうちでは此馬鹿がと思つてるに相違ない。夫でなければあゝ云ふ風に私語き合つてはくすくす笑ふ譯がない。教場へ出ると生徒は拍手を以て迎へた。先生萬歲と云ふものが二三人あつた。景氣がいゝんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の燒點となつてるなかに、赤シヤツ計りは平常の通り傍へ來てどうも飛んだ災難でした。僕は君等に對して御氣の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手續にして置いたから、心配しなくてもいゝ。僕の弟が堀田君を誘ひに行つたから、こんな事が起こつたので、僕は實に申し譯がない。それで此件に就いては飽く迄盡力する積りだから、どうかあしからず、抔と半分謝罪的な言葉を竝べて居る。校長は三時間目に校長室から出て來て、困つた事を新聞がかき出しましたね。六づかしくならなければいゝがと多少心配さうに見えた。おれには心配なんかない。先で免職をするなら、免職される前に辭表を出して仕舞ふ丈だ。然し自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋を、益增長させる譯だから、新聞屋を正誤させておれが意

地にも務めるのが順當だと考へた。歸りがけに新聞屋に談判に行かうと思つたが、學校から取消の手續はしたと云ふから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計らつて、嘘のない所を一應說明した。校長と教頭はさうだらう、新聞屋が學校に恨を抱いて、あんな記事をことさらに掲げたんだらうと論斷した。赤シャツはおれらの行爲を辯解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいて居た。ことに自分の弟が山嵐を誘ひ出したのを自分の過失であるかの如く吹聽して居た。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、兩君は實に災難だと云つた。

歸りがけに山嵐は君赤シャツは臭いぜ用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんぢやなからうと云ふと、君まだ氣が附かないか、きのふわざ〳〵僕等を誘ひ出して、喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教へてくれた。成程そこ迄は氣がつかなかつた。山嵐は粗暴な樣だが、おれより智慧のある男だと感心した。

「あゝやつて喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかゝせたんだ。實に奸物だ」

「新聞迄も赤シャツか。そいつは驚いた。然し新聞が赤シャツの云ふ事をさう容易く聽くかね」

「聽かなくつて。新聞屋に友達が居りや譯はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても譯ないさ。嘘をついて、事實是々だと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本當に赤シャツの策なら、僕等は此事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辭表を出して直ぐ東京へ歸つちまはあ。こんな下等な所に賴んだつて居るのはいやだ」

「君が辭表を出したつて、赤シャツは困らないさ」

「それもさうだな。どうしたら困るだらう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも證據の擧がらない樣に、擧がらない樣にと工夫するんだから反駁するのは六づかしいね」

「厄介だな。それぢや濡衣を着るんだね。面白くもない。天道是耶非耶だ」

「まあ、もう二三日樣子を見ようぢやないか。夫で愈となつたら、溫泉の町で取つて抑へるより仕方がないだらう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「さうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑へるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、萬事宜しく頼む。いざとなれば何でもする」

おれと山嵐は是で分かれた。赤シャツが果して山嵐の推察通りをやつたのなら、實にひどい奴だ。到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくつちや駄目だ。成程世界に戰爭は絶えない譯だ。個人でも、とゞの詰りは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披いて見ると、正誤所か取消も見えない。學校へ行つて狸に催促すると、あした位出すでせうと云ふ。明日になつて六號活字で小さく取消が出た。然し新聞屋の方で正誤は無論して居らない。又校長に談判すると、あれより手續のしやうはないだと云ふ答だ。校長なんて狸の樣な顏をして、いやにフロック張つてゐるが存外無勢力なものだ。虚僞の記事を掲げた田舍新聞一つ詫らせる事が出來ない。あんまり腹が立つたから、それぢや私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すれば又惡口を書かれる計りだ。つまり新聞屋にかゝれた事は、うそにせよ、本當にせよ、詰りどうする事も出來ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の說敎じみた說諭を加へた。新聞がそんな者なら、

一日も早く打つ潰して仕舞つた方が、われ〳〵の利益だらう。新聞にかゝれるのと、泥鼈に喰ひつかれるとが似たり寄つたりだとは今日只今狸の說明に因つて始めて承知仕つた。

夫から三日許りして、ある日の午後、山嵐が憤然とやつて來て、愈〳〵時機が來た、おれは例の計畫を斷行する積りだと云ふから、さうかそれぢやおれもやらうと、卽座に一味徒黨に加盟した。所が山嵐が、君はよす方がよからうと首を傾けた。何故と聞くと君は校長に呼ばれて辭表を出せと云はれたかと尋ねるから、いや云はれない。君は？と聽き返すと、今日校長室で、まことに氣の毒だけれども、事情已むを得んから處決してくれと云はれたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顚倒したんだ。君とおれは、一所に祝勝會へ出てさ、一所に高知のぴか〳〵踊を見てさ、一所に喧嘩をとめに這入つたぢやないか。辭表を出せといふなら公平に兩方へ出せと云ふがいゝ。なんで田舍の學校はさう理窟が分らないんだらう。焦慮いな」

「それが赤シャツの指金だよ。おれと赤シャツとは今迄の行き掛り上到底兩立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思つてるんだ」

「おれだつて赤シャツと兩立するものか。害にならないと思ふなんて生意氣だ」

「君はあまり單純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化されると考へてるのさ」

「猶悪いや。誰が兩立してやるものか」

「夫に先達て古賀が去つてから、まだ後任が事故の爲に到着しないだらう。其上に君と僕を同時に追ひ出しちや、生徒の時間に明きが出來て、授業にさし支へるからな」

「夫ぢやおれを間のくさびに一席伺はせる氣なんだな。こん畜生、だれが其手に乘るものか」

翌日おれは學校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。

「何で私に辭表を出せと云はないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られて居る。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云ふ法がありますか」

「それは學校の方の都合で……」

「其都合が間違つてまさあ。私が出さなくつて濟むなら堀田だつて、出す必要はないでせう」

「其邊は說明が出來かねますが——堀田君は去られても已むを得んのですが、あなたは辭表を御出しになる必要を認めませんから」

成程狸だ、要領を得ない事ばかり竝べて、しかも落ち附き拂つてる。おれは仕樣がないから

「それぢや私も辭表を出しませう。堀田君一人辭職させて、私が安閑として留まつて居られると思つて入らつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出來ません」

「それは困る。堀田君も去りあなたも去つたら、學校の數學の授業が丸で出來なくなつて仕舞ふから……」

「出來なくなつても私の知つた事ぢやありません」

「君さう我儘を云ふものぢやない、少しは學校の事情も察して呉れなくちや困る。夫に來てから一月立つか立たないのに辭職したと云ふと、君の將來の履歷に關係するから、其邊も少しは考へたらいゝでせう」

「履歷なんか構ふもんですか、履歷より義理が大切です」

「そりや御尤も——君の云ふ所は一々御尤もだが、わたしの云ふ方も少しは察して下さい。君が是非辭職すると云ふなら辭職されてもいゝから、代りのある迄どうかやつて貰ひたい。とにかく、うちでもう一返考へ直して見て下さい」

考へ直すつて、直し樣のない明々白々たる理由だが、狸が着くなつたり、赤くなつたりして、可哀相になつたから一先づ考へ直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。ど

うせ遣つ附けるなら塊めて、うんと遣つ附ける方がいゝ。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だらうと思つた。辭表の事はいざとなる迄其儘にして置いても差し支へあるまいとの話だつたから、山嵐の云ふ通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利口らしいから萬事山嵐の忠告に從ふ事にした。

山嵐は愈〻辭表を出して、職員一同に告別の挨拶をして濱の港屋迄下がつたが、人に知れないやうに引き返して、溫泉の町の外屋の表二階へ潛んで障子へ穴をあけて覗き出した。是を知つてるものはおれ計りだらう。赤シャツが忍んで來ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒や其他の目があるから少くとも九時過ぎに極まつてる。最初の二晩はおれも十一時頃迄張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半迄覗いたが矢張り駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ歸る程馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんの御有りるのに、夜遊びはおやめたがえゝぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ふ。こつちのは天に代つて誅戮を加へる夜遊びだ。とは云ふものゝ一週間も通つて、少しも驗が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をするが、其代り何によらず長持ちのした試しがない。如何に天誅黨でも飽きる事に變りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休まうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から十二時過ぎ迄は眼を障子へつけて、角屋の丸ぽやの瓦斯燈の下を晩めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人と色々な統計を示すのには驚いた。どうも來ない樣ぢやないかと云ふと、うん、慥かに來る筈だがと時々腕組をして溜息をつく。可哀相に、もし赤シャツが此所へ一度來てくれなければ、山嵐は、生涯天誅を加へる事は出來ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、先づ緩りと湯に入つて、夫から町で鷄卵を八つ買つた。是は下宿の婆さんの芋責めに應ずる策である。其玉子を四つ宛左右の袂へ入れて、例の赤手拭を肩へ乘せて、懷手をしながら、外屋の梯子段を登つて山嵐の座敷の障子をあけると、おい有望有望と韋駄天の樣な顏は急に活氣を呈した。昨夜迄は少し塞ぎの氣味で、はたで見て居るおれさへ、陰氣臭いと思つた位だが、此顏色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴と云ふ藝者が角屋へ這入つた」

「赤シャツと一所か」

「いゝや」

「それぢや駄目だ」
「藝者は二人づれだが、――どうも有望らしい」
「どうして」
「どうしてつて、あゝ云ふ狡い奴だから藝者を先へよこして後から忍んでくるかも知れない」
「さうかも知れない。もう九時だらう」
「今九時十二分許りだ」と帶の間からニッケル製の時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が寫つては可笑しい。狐はすぐ疑ぐるから」
おれは一閑張の机の上にあつた置き洋燈をふつと吹きけした。星明りで障子丈は少々あかるい。月はまだ出て居ない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息を凝らして居る。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。
「おい來るだらうかな。今夜來なければ僕はもう厭だぜ」
「おれは錢のつゞく限りやるんだ」
「錢つていくらあるんだい」
「今日迄で八日分五圓六十錢拂つた。いつ飛び出しても都合のいゝ樣に每晩勘定するんだ」

「夫は手廻しがいゝ。宿屋で驚いてるだらう」
「宿屋はいゝが、氣が放せないから困る」
「其代り晝寢をするだらう」
「晝寢はするが、外出が出來ないんで窮屈で堪らない」
「天誅も骨が折れるな。是で天網恢々疎にして洩らしちまつたり、何かしちや、詰まらないぜ」
「なに今夜は屹度くるよ。――おい見ろ見ろ」と小聲になつたから、おれは思はずどきりとした。黒い帽子を戴いた男が角屋の瓦斯燈を下から見上げた儘暗い方へ通り過ぎた。違つて居る。おや〳〵と思つた。其うち帳場の時計が遠慮もなく十時を打つた。今夜もとう〳〵駄目らしい。
世間は大分靜かになつた。遊廓で鳴らす太鼓が手に取る樣に聞こえる。月が溫泉の山の後からのつと顏を出した。往來はあかるい。すると、下の方から人聲が聞こえだした。窓から首を出す譯には行かないから、姿を突き留める事は出來ないが、段々近附いて來る模樣だ。からん〳〵と駒下駄を引き擦る音がする。眼を斜にするとやつと二人の影法師が見える位に近附いた。
「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追つ拂つたから」正しく野だの聲である。「强がる計りで策がないから、仕樣がない」是は赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似て居ますね。あのべらん

めえと來たら、勇み肌の坊つちやんだから愛嬌がありますよ」「增給がいやだの辭表が出したいのつて、ありやどうしても神經に異狀があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思ふ樣打ちのめして遣らうと思つたが、やつとの事で辛抱した。二人はハヽヽと笑ひながら、瓦斯燈の下を潛つて、角屋の中へ這入つた。

「おい」

「來たぜ」

「とう〳〵來た」

「是で漸く安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊つちやんだと拔かしやがつた」

「邪魔物と云ふのはおれの事だぜ、失敬千萬な」

おれと山嵐は二人の歸路を要擊しなければならない。然し二人はいつ出て來るか見當がつかない。山嵐は下へ行つて今夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られる樣にして置いてくれと賴んで來た。今思ふとよく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違へられる所だ。

赤シャツの來るのを待ち受けたのはつらかつたが、出て來るのを凝として待つてるのは猶つらい。寐る譯には行かないし、始終障子の隙から睨めて居るのもつらいし、どうも、かうも心が落ちつかなくつて、是程難儀な思ひをした事は未だにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑へようと發議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、亂暴者だと云つて途中で遮られる。譯を話して面會を求めれば居ないと逃げるか別室へ案內をする。不用意の所へ踏み込めると假定した所で何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云ふから、漸くの事でとう〳〵朝の五時迄我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下迄あるかなければならない。溫泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右は田甫になる。それを通りこすとこゝかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下迄通る土手へ出る。町さへはづれゝば、どこで追ひ附いても構はないが、可成なら、人家のない、杉並木で捕まへてやらうと、見えがくれについて來た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやての樣

に後から追ひ附いた。何が來たかと驚いて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狽の氣味で逃げ出さうと云ふ氣色だつたから、おれが前へ廻つて行手を塞いで仕舞つた。

「教頭の職をもつてるものが何で角屋へ行つて泊まつた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊まつて惡いといふ規則がありますか」と赤シャツは依然として丁寧な言葉を使つてる。顏の色は少々蒼い。

「取締上不都合だから、蕎麥屋や團子屋へさへ這入つて行かんと、云ふ位謹直な人が、なぜ藝者と一所に宿屋へ泊まり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出さうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊つちやんた何だ」と怒鳴り附けたら「いえ君の事を云つたんぢやないんです、全くないんです」と鐵面皮に言譯がましい事をぬかした。おれは此時氣がついて見たら兩手で自分の袂を握つてる。追つかける時に袂の中の卵がぶら〳〵して困るから、兩手で握りながら來たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云ひながら、野だの面へ擲き附けた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだら〳〵流れだした。野だは餘つ程仰天した者と見えて、わつと言ひながら、尻持をついて、助けて呉れと云つた。おれは食ふ爲に玉子は買つたが、打つける爲に袂へ入れてる譯ではない。只肝癪のあまりに、ついぶつけるともなしに打つけて仕舞つたのだ。然し野だが尻持を突いた所を見て始めて、おれの成功した事に氣がついたから、此畜生、此畜生と云ひながら殘る六つを無茶苦茶に擲き附けたら、野だは顏中黄色になつた。

おれが玉子をたゝきつけて居るうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「藝者を連れて僕が宿屋へ泊まつたと云ふ證據がありますか」

「宵に貴樣のなじみの藝者が角屋へ這入つたのを見て云ふ事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊まつたのである。藝者が宵に這入らうが、這入るまいが、僕の知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨を食らはした。赤シャツはよろ〳〵したが「是は亂暴だ、狼藉である。理非を辨じないで腕力に訴へるのは無法だ」

「無法で澤山だ」とまたぽかりと撲る。「貴樣の樣な奸物はなぐらなくつちや、答へないんだ」とぽか〳〵なぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据ゑた。仕舞ひには二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちら〳〵するのか逃げようともしない。

「もう澤山か、澤山でなけりや、まだ撲つてやる」とぽかん〳〵と兩人でなぐつたら「もう澤

山だ」と云つた。野だに「貴様も澤山か」と聞いたら「無論澤山だ」と答へた。

「貴様等は奸物だから、かうやつて天誅を加へるんだ。これに懲りて以來つゝしむがいゝ。いくら言葉巧みに辯解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつてゐた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隱れもせん。今夜五時迄は濱の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云ふから、おれも「おれも逃げも隱れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてるから警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と云つて、二人してすた〳〵あるき出した。

おれが下宿へ歸つたのは七時少し前である。部屋へ這入るとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どう御爲るのぞなもしと聞いた。御婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答へて勘定をすまして、すぐ汽車へ乘つて濱へ來て港屋へ着くと、山嵐は二階で寢て居た。おれは早速辭表を書かうと思つたが、何と書いていゝか分らないから、私儀都合有之辭職の上東京へ歸り申候につき左樣御承知被下度候以上とかいて、校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐう〳〵寢込んで眼が覺めたら、午後二時であつた。下女に巡査は來ないかと聞いたら參りませんと答へた。「赤シャツも野だも訴へなかつたなあ」と二人で大きに笑つた。

其夜おれと山嵐は此の不淨な地を離れた。船が岸を去れば去る程いゝ心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出た樣な氣がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日迄逢ふ機會がない。

清の事を話すのを忘れて居た。――おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げた儘、清や歸つたよと飛び込んだら、あら坊つちやん、よくまあ早く歸つて來て下さつたと涙をぽたゝと落とした。おれも餘り嬉しかつたから、もう田舍へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

其後ある人の周旋で街鐵の技手になつた。月給は二十五圓で家賃は六圓だ。清は玄關附きの家でなくつても至極滿足の樣子であつたが氣の毒な事には今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら、坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

草枕

——三九、九、一——

一

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣にちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く計りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容げて、束の間の命を、

束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落とさぬとも瑣鄙の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、——千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜びの深きとき憂ひ愈〳〵深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寐る間も心配だらう。戀はうれしい、嬉しい戀が積もれば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかろ。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考へがこゝ迄漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損なつた。平衡を保つ爲に、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せた樣な峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが根本から頂迄悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續ぎ目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を譲る氣色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならん。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら〳〵と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下ろしたが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞こえる。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たたまれない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ氣が濟まんと見える。其上どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下ろすと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上がる雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上がる時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の聲を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其二三句のなかにこんなのがある。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑ひといへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などと云ふ字がある。詩人だから萬斛で素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあらうが、無量の悲しみも多からう。そんならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へのして眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭座して居る。呑氣なものだ。又考へをつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、蒲公英も其通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。只うれしくて胸が躍る計りだ。

かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貫つて、開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂しませつゝあるから苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

戀はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當たれば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。從つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲には、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免れぬ。苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり

する。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ點に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽き〳〵した上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脫する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脫したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寐込む樣な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人もみんな、西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を浮べて此桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分にはかう云ふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になる樣に思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも難有く考へられる。かうやつて、只一人繪の具箱と三脚兀を擔いで春の山路をのそ〳〵あるくのも全く之が爲である。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて

年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寐た男でもなからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢ふ。じん〳〵端折りの頬冠りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬に迄逢ふ。百萬本の檜に取り圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。夫所か、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の溫泉場だ。

唯、物は見樣でどうでもなる。レオナルド・ダ・ヰンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見樣次第で如何樣とも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狹苦しく暮らした時とは違ふだらう。よし全く人情を離れる事が出來んでも、責めて御能拜見の時位な淡い心持ちにはなれさうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保證が出來ん。然しあれは情三分藝七分で見せるわざだ。彼等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に寫す手際から出てくるのではない。其儘の上へ藝術といふ着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出來事と、旅中に出逢ふ人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう。丸で人情を棄てる譯には行くまいが、根が詩的に出來た旅だから、非人情のやり序に、可成節儉してそこ迄は漕ぎ附けたいものだ。南山や幽篁とは性の違つたものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事も出來まいが、可成元に近づけて、近づき得る限りは同じ觀察點から人間を視てみたい。芭蕉と云ふ男は枕元へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立てて發句にした。余も是から逢ふ人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——悉く大自然の點景として描き出されたものと假定して取りこなして見よう。尤も畫中の人物と違つて、彼等はおのがじゝ勝手な眞似をするだらう。然し普通の小說家の樣に其の勝手な眞似の根本を探つて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。畫中の人間が動くと見れば差し支へない。畫中の人物はどう動いても平面以外に出られるものでない。平面以外に飛び出して、立方的に動くと思へばこそ、此方と衝突したり、利害の交涉が起つたりして面倒になる。面倒になればなる程美的に見て居る譯に行かなくなる。是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電氣が無暗に双方で起らない樣にする。さうすれば相手がい

くら動いても、こちらの懐には容易に飛び込めない譯だから、つまりは畫の前へ立つて、畫中の人物が畫面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ譯になる。間三尺も隔てて居れば落ち附いて見られる。あぶな氣なしに見られる。言を換へて云へば、利害に氣を奪はれないから、全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出來る。餘念もなく美か美でないかと鑒識する事が出來る。

こゝ迄決心をした時、空があやしくなつて來た。袤え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸かつて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しと〳〵と春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過ごして、今は山と山の間を行くのだが、雨の絲が濃やかで殆ど霧を欺く位だから、隔りはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黒い山の脊が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく〳〵顔を出す。出すかと思ふと、隱れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。路は存外廣くなつて、且平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり〳〵と落つる頃、五六間先から、鈴の音がして、黒い中から、馬子があらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の樣に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は筋毎に風に捲かれる樣迄が目に入る。羽織は とくに濡れ盡して肌着に浸み込んだ水が、身體の溫度で生暖く感ぜられる。氣持ちがわるいから、帽を傾けてすた〳〵歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも咏まれる。有體なる己を忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮ばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めて帽を傾けて歩行いた。

後には唯足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る〳〵歩行いた。雨は滿目の樹梢を搖かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎた様だ。

二

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から釣るされて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つ許り竝んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれて居た鷄が、驚いて眼をさます。クヽヽ、クヽヽと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が、今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鷄は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄馳けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。丸で余を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顏で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るには極まつてゐる。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつ迄も待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。こゝらが非人情で面白い。其上出て來た婆さんの顏が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸りを五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顏が殆ど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、其表情はぴしやりと心のカメラへ燒き附いて仕舞つた。茶店の婆さんの顏は此

寫眞に血を通はした程似て居る。

「お婆さん、此所を一寸借りたよ」

「はい、是は一向、存じませんで」

「大分降つたね」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おゝ〳〵大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ」

「そこをもう少し燃し附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しつ〳〵と二聲で鷄を追ひ下げる。こゝゝと馳け出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか刳り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に燒き附けられて居る。

「御菓子を」と今度は鷄の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り殘されてゐた。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取り出して、婆さんの横顏を寫しながら、話しをしかける。

「閑靜でいゝね」

「へえ、御覽の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「えゝ毎日の樣に鳴きます。此邊は夏も鳴きますか」

「聞きたいな、ちつとも聞こえないと猶聞きたい」

「生憎今日は——先刻の雨で何處ぞへ逃げました」

折から、竈のうちが、ぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起こして一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。嘸御寒かろ」と云ふ。軒端を見ると青い烟が、突き當たつて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持ちだ、御蔭で生き返つた」

「い、具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に巉巌と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。

余はまづ天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に兩方を見比べた。畫家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の婆と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪の圖を見たとき、理想の婆さんは物凄いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考へた。寶生の別會能を觀るに及んで、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めて名人の刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落としたが、老人もかうあらはせば、豐かに、穩やかに、あたゝかに見える。金屏にも、春風にも、あるは櫻にもあしらつて差し支へない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指さしてゐる、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が寫生帖を取り上げて、今暫らくといふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に寫生帖を、火にあてて乾かしながら、

「御婆さん、丈夫さうだね」と訊ねた。

「はい。難有い事に達者で——針も持ちます、苧もうみます、御團子の粉も磨きます」

此御婆さんに石臼を挽かして見たくなつた。然しそんな注文も出來ぬから、

「こゝから那古井迄は一里足らずだつたね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合はなければ、少し逗留しようかと思ふが、まあ氣が向けばさ」

「いえ、戰爭が始まりましてから、頓と參るものは御座いません。丸で締め切り同樣で御座います」

「妙な事だね。それぢや泊めて呉れないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたつた一軒だつたね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隱居所だかわかりません」

「ぢや御客がなくても平氣な譯だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前一寸行つた事がある」

會話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鷄を靜かに寫生して居ると、落ち附いた耳の底へぢやらん〳〵と云ふ馬の鈴が聞こえ出した。此聲がおのづと、拍子をとつて頭の中に一種の調子が出來る。眠りながら、一夢に隣の臼の音に誘はれる樣な心持ちである。余は鷄の寫生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らして居る。今の世の馬とは思はれない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に氣樂な響がこもつて、どう考へても畫にかいた聲だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と今度は斜に書き附けたが、書いて見て、是は自分の句でないと氣が附いた。

「又誰ぞ來ました」と婆さんが半ば獨り言の樣に云ふ。

只一條の春の路だから、行くも歸るも皆近附と見える。最前逢うた五六匹のぢやらん〳〵も悉く此婆さんの腹の中で又誰ぞ來たと思はれては山を下り、思はれては山を登つたのだらう。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭へば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からぢやらんぢやらんを數へ盡して、今日の白頭に至つたのだらう。

馬子唄や白髪も染めで暮るゝ春

と次のページへ認めたが、是では自分の感じを云ひ終せない、もう少し工夫のありさうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考へた。何でも白髪といふ字を入れて、幾代の節と云ふ句を入れて、馬子唄といふ題も入れて、春の季も加へて、それを十七字に纏めたいと工夫して居るうちに、

「はい、今日は」と實物の馬子が店先に留まつて大きな聲をかける。

「おや源さんか。又城下へ行くかい」

「何か買物があるなら賴まれて上げよ」

「さうさ、鍛冶町を通つたら、娘に靈嚴寺の御札を一枚もらつてきて御呉れなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。——お秋さんは善い所へ片附いて仕合せだ。な、叔母さん」

「難有い事に今日には困りません。まあ仕合せと云ふのだらうか」

「仕合せとも、御前。あの那古井の嬢さまと比べて御覧」
「本當に御氣の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合がいゝかい」
「なあに、相變らずさ」
「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。
「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。
枝繁き山櫻の葉も花も、深い空から落ちた儘なる雨の塊りを、しつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たゝまれずに、假の住居を、さら〳〵と轉げ落ちる。馬は驚いて、長い鬣を上下に振る。
「コーラッ」と叱り附ける源さんの聲が、ぢやらん、ぢやらんと共に余の冥想を破る。
御婆さんが云ふ。「源さん、わたしや、お嫁入のときの姿が、まだ眼先に散らついて居る。裾模樣の振袖に、高島田で。馬に乘つて……」
「さうさ、船ではなかつた。馬であつた。矢張り此所で休んで行つたな、叔母さん」
「あい、其櫻の下で孃樣の馬がとまつたとき、櫻の花がほろ〳〵と落ちて、折角の島田に斑が出來ました」

余は又寫生帖をあける。此景色は畫にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、當時の樣を想像して見てしたり顏に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書き附ける。不思議な事には衣裳も髮も馬も櫻もはつきりと目に映じたが、花嫁の顏だけは、どうしても思ひつけなかつた。しばらくあの顏か、この顏か、と思案して居るうちに、ミレーの折角の圖面を早速取り崩す。衣裳も髮も馬も櫻も一瞬間に心の道具立から綺麗に立ち退いたが、かいた、オフエリヤの面影が忽然と出て來て、高島田の下へすぽりとはまつた。是は駄目だと、オフエリヤの合掌して水の上を流れて行く姿丈は、朦朧と胸の底に殘つて、棕梠箒で烟を拂ふ樣に、さつぱりしなかつた。空に尾を曳く彗星の何となく妙な氣になる。

「それぢや、まあ御免」と源さんが挨拶する。
「歸りに又御寄り。生憎の降りで七曲りは難儀だろ」
「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行き出す。源さんの馬も歩行き出す。ぢやらん〳〵。
「あれは那古井の男かい」
「はい、那古井の源兵衞で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠を越したのかい」

「志保田の嬢様が城下へ御輿入のときに、嬢様を青馬に乗せて、源兵衛が羈絏を牽いて通りました。——月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡に對ふときのみ、わが頭の白きを咄つものは幸の部に屬する人である。指を折つて始めて、五年の流光に、轉輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としては寧ろ仙に近づける方だらう。

余は斯う答へた。

「嘸美しかつたらう。見にくればよかつた」

「ハヽヽ今でも御覽になれます。湯治場へ御越しなされば、屹度出て御挨拶をなされませう」

「はあ、今では里に居るのかい。矢張り裾模様の振袖を着て、高島田に結つて居ればいゝが」

「たのんで御覽なされ。着て見せましよ」

余はまさかと思つたが、婆さんの樣子は存外眞面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云ふ。

「嬢樣と長良の乙女とはよく似て居ります」

「顏がかい」

「いゝえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、其長良の乙女と云ふのは何者かい」

「昔此村に長良の乙女と云ふ、美しい長者の娘が御座りましたさうな」

「へえ」

「所が其娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」

「なる程」

「さゝだ男に靡かうか、さゝべ男に靡かうかと、娘はあけくれ思ひ煩つたが、どちらへも靡きかねて、とう〳〵

あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも

と云ふ歌を咏んで、淵川へ身を投げて果てました」

余はこんな山里へ來て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉で、こんな古雅な話をきかうとは思ひがけなかつた。

「是から五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。序に長良の乙女の墓を見て御行きなされ」

余は心のうちに是非見て行かうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつゞける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟りましたね」

なさつたので、一人はこゝの城下で随一の物持で御座んす」

「はあ、御嬢さんはどつちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由もありましたろが、親御様が無理にこちらへ取り極めて……」

「目出度、淵川へ身を投げんでも済んだ譯だね」

「所が——先方でも器量望みで御貰ひなさつたのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御ぬが、もと〳〵強ひられて御出でなさつたのだから、随分大事にはなすつたかも知れません心配の様子で御座んした。所へ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出での銀行がつぶれました。それから嬢様は又那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内氣の優しいかたが、此頃では大分氣が荒くなつて、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

是からさきを聞くと、折角の趣向が壊れる。漸く仙人になりかけた所を、誰か来て羽衣を返せ返せと催促する様な氣がする。七曲りの険を冒して、やつとの思ひで、こゝ迄来たものを、さう無暗に俗界に引きずり下ろされては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭ひが毛孔から染み込んで、垢で身體が重くなる。

「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十錢銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁程の近道になります。路はわるいが、御若い方には其方がよろしかろ。——是は多分に御茶代を——氣を附けて御越しなされ」

三

昨夕は妙な氣持ちがした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭の作り方は無論、東西の區別さへわからなかつた。何だか廻廊の様な所をしきりに引き廻されて、仕舞ひに六疊程の小さな座敷に入れられた。昔來た時とは丸で見當が違ふ。晩餐を濟まして、湯に入つて、室へ歸つて茶を飲んで居ると、小女が來て床を延べよかと云ふ。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の案内も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒

も、悉く此小女一人で辨じて居る。それで口は滅多にきかぬ。と云うて、田舎染みても居らぬ。赤い帶を色氣なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下の樣な、梯子段の樣な所をぐる〳〵廻らされた時、同じ帶の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、既に自分ながら、カンヴスの中を往來して居る樣な氣がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つて居る部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい言葉を述べて、出て行つたが、其足音が、例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠ざかつた時に、あとがひつそりとして、人の氣がしないのが氣になつた事がある。

生れてから、こんな經驗はたゞ一度しかない。昔房州を館山から向うへ突き拔けて、上總から銚子迄濱傳ひに步行いた事がある。其時ある晩、ある所へ宿まつた。ある所と云ふより外に言ひ樣がない。今では土地の名も宿の名も、丸で忘れて仕舞つた。第一宿屋へとまつたのかが問題である。棟の高い大きな家に女がたつた二人居た。余がとめるかと聞いたとき、年を取つた方がはいと云つて、若い方が此方へと案內をするから、ついて行くと、荒れ果てた、廣い間をいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案內をした。三段登つて廊下から部屋へ這入らうとすると、板庇の下に傾きかけて居た一叢の修竹が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、既にひやりとした。緣板は既に朽ちかゝつて居る。來年は筍が緣を突き拔いて座敷のなかは竹だらけにならうと云つたら、若い女が何も云はずににや〳〵と笑つて、出て行つた。

其晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寢られない。障子をあけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明らかなるに、眼を走らせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に續いてゐる。草山の向うはすぐ大海原でどゞん〳〵と大きな濤が人の世を威嚇かしに來る。余はとう〳〵夜の明ける迄一睡もせずに、怪し氣な蚊帳のうちに辛抱しながら、丸で草双紙にでもありさうな事だと考へた。

其後旅も色々したが、こんな氣持ちになつた事は、今夜この那古井へ宿まる迄はかつて無かつた。

仰向けに寢ながら、偶然眼を開けて見ると棚間に、朱塗の緣をとつた額がかゝつてゐる、文字は寢ながらも竹影拂階塵不動と明かに讀まれる。大徹といふ落款も慥かに見える。余は書に於ては皆無鑑識のない男だが、平生から、黃檗の高泉和尙の筆致を愛して居る。隱元も卽非も木庵も夫々に面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今此七字を見ると、筆のあ

たりから手の運び具合、どうしても高泉としか思はれない。しかし現に大徹とあるからには別人だらう。ことによると黄檗に大徹といふ坊主が居たかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかゝつてゐる若冲の鶴の圖が目につく。是は商賣柄丈に、部屋に這入つた時、既に逸品と認めた。若冲の圖は大抵精緻な彩色ものが多いが、此鶴は世間に氣兼なしの一筆がきで、一本足ですらりと立つた上に、卵形の胴がふはつと乗つかつてゐる樣子は、甚だ吾意を得て、飄逸の趣は、長い嘴のさき迄籠つてゐる。床の隣は違ひ棚を略して、普通の戸棚につゞく。戸棚の中には何があるか分らない。

すや〳〵と寐入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乘つて、峠を越すと、いきなり、さゝだ男と、さゝべ男が飛び出して兩方から引つ張る。女が急にオフエリヤになつて、柳の枝へ上つて、河の中を流れながら、うつくしい聲で歌をうたふ。救つてやらうと思つて、長い竿を持つて、向島を追つ懸けて行く。女は苦しい樣子もなく、笑ひながら、うたひながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おゝい〳〵と呼ぶ。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出てゐる。妙に雅俗混淆な夢を見たものだと思つた。昔宋の大慧禪師と云ふ人は、悟道の後、何事も意の如くに出來ん事はないが、只夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたさうだが、成程尤もだ。文藝を生命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢では大部分畫にも詩にもならんと思ひながら、寐返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜に影をひたしてゐる。冴える程の春の夜だ。

氣の所爲か、誰か小聲で歌をうたつてる樣な氣がする。夢のなかの歌が、此世へ拔け出したのか、或は此世の聲が遠き夢の國へ、うつゝながらに紛れ込んだのかと耳を峙てる。慥かに誰かうたつてゐる。細く且低い聲には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷の脈をかすかに搏たせつつある。不思議な事に、其調子はとにかく、文句をきくと——枕元でやつてるのでないから、文句のわかりやうはない。——其の聞こえぬ筈のものが、よく聞こえる。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良の乙女の歌を、繰り返し繰り返す樣に思はれる。

初めのうちは緣に近く聞こえた聲が、次第々々に細く遠退いて行く。突然と已むものには、突

然の感はあるが、憐れはうすい。ふつつりと思ひ切つたる聲をきく人の心には矢張りふつつりと思ひ切つたる感じが起る。是と云ふ句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われも亦秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫の如く、消えんとしては、消えんとする燈火の如く、今已むか已むかとのみ心を劒す此歌の奥には、天下の春の恨みを悉く萃めたる調べがある。

今迄は床の中に我慢して聞いて居たが、聞く聲の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるゝと知りつゝも、其聲を追ひかけたくなる。細くなればなる程、耳丈になつても、あとを慕つて飛んで行きたい氣がする。もうどう焦慮つても鼓膜に應へはあるまいと思ふ一刹那の前、余は堪らなくなつて、われ知らず布團をすり抜けると共にさらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜に月の光を浴びる。寐卷の上にも木の影が搖れながら落ちた。

障子をあけた時には、そんな事には氣が附かなかつた。あの聲はと、耳の走る見當を見破ると——向うに居た。花ならば海棠かと思はるゝ幹を背に、よそ〳〵しくも月の光を忍んで朦朧たる影法師が居た。あれかと思ふ意識さへ、確とは心にうつらぬ間に、黒いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わが居る部屋つゞきの棟の角が、すらりと動く、脊の高い女姿を、すぐに遮つて

仕舞ふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつた儘、しばらく茫然として居たが、やがて我に歸ると、山里の春は中々寒いものと悟つた。ともかくもと抜け出でた布團の穴に、再び歸參して考へ出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考へ出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるひは此家の御嬢さんかも知れない。然し出歸りの御嬢さんとしては夜なかに山つゞきの庭へ出るのがちと不穩當だ。何にしても中々寐られない。枕の下にある時計迄がちく〳〵口をきく。今迄懐中時計の音の氣になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考へろ、さあ考へろと催促する如く、寐るなと忠告する如く口をきく。怪しからん。

怖いものも只怖いもの其儘の姿と見れば詩になる。凄い事も、己を離れて、只單獨に凄いのだと思へば畫になる。失戀が藝術の題目となるのも全くその通りである。失戀の苦しみを忘れて、其のやさしい所やら、同情の宿る所やら、憂のこもる所やら、一歩進めて云へば失戀の苦しみ其物の溢るゝ所やらを、單に客觀的に眼前に思ひ浮べるから文學美術の材料になる。世には有りもせぬ失戀を製造して、自ら強ひて煩悶して、愉快を貪るものがある。常人は之を評して愚だと云

ふ、氣違ひだと云ふ。然し自ら不幸の輪廓を描いて好んで其中に起臥するのは、自ら烏有の山水を刻畫して壺中の天地に歡喜すると、その藝術的の立脚地を得たる點に於て全く等しいと云はねばならぬ。この點に於て世上幾多の藝術家は（日常の人としてはいざ知らず）藝術家として常人よりも愚である、氣違ひである。われ〳〵は草鞋旅行をする間、朝から晩迄苦しい、苦しいと不平を鳴らしつゞけて居るが、人に向つて曾遊を說く時分には、不平らしい樣子は少しも見せぬ。面白かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさへ得意に喋々して、したり顏である。これは敢て自ら欺くの、人を僞るのと云ふ了見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときは既に詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起こる。して見ると、四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して、三角のうちに住むのを藝術家と呼んでもよからう。

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の辟易して近づき難しとなす所に於て、藝術家は無數の琳琅を見、無上の寶璐を知る。俗に之を名づけて美化と云ふ。其實は美化でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に實在して居る。只一翳眼に在つて空花亂墜するが故に、俗累の羈絏牢として絕ち難きが故に、榮辱得喪のわれに逼る事、念々切なるが故に、ターナーが汽車を寫す迄は汽車の美を解せず、鷹擧が幽靈を描く迄は幽靈の美を知らずに打ち過ぎるのである。

余が今見た影法師も、只それ限りの現象とすれば、誰が見ても、誰に聞かしても饒かに詩趣を帶びて居る。——孤村の溫泉、——春宵の花影、——月前の低誦、——朧夜の姿——どれも是も藝術家の好題目である。此好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮議立てをして、餘計な探りを投げ込んで居る。折角の雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、氣味の惡さが踏み附けにして仕舞つた。こんな事なら、非人情も標榜する價値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも畫家とも人に向つて吹聽する資格はつかぬ。昔以太利亞の畫家サルヴトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危險を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と畫帖を懷にして家を出でたからには、余にも其位の覺悟がなくては恥づかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に歸れるかと云へば、おのれの感じ、其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一步退いて有體に落ち附いて、他人らしく之を檢査する餘地さへ作ればいゝのである。詩人とは自分の死骸を、自分で解剖して、其病狀を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめて見るのが一番いゝ。十七字は詩形として尤も輕便であるから、顏を洗ふ時にも、厠に上つた時にも、電車に

乘つた時にも、容易に出來る。十七字が容易に出來ると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから輕便だと云つて侮蔑する必要はない。輕便であればある程功德になるから却て尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所をすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちが既に他人に變じて居る。腹を立つたり、俳句を作つたり、さう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす。此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出來る男だと云ふ嬉しさ丈の自分になる。

是が平生から余の主張である。今夜も一つ此主張を實行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出來たら書きつけないと散漫になつて行かぬと、念入りの修業だから、例の寫生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と眞先に書き附けて讀んで見ると、別に面白くもないが、さりとて氣味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやつたが、是は季が重なつて居る。然し何でも構はない、氣が落ち附いて呑氣になればいゝ。夫から「正一位、女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分ながら可笑しくなつた。

此調子なら大丈夫と乘氣になつて出る丈の句をみなかき附ける。

春の星を落して夜半のかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髮

春や今宵歌つかまつる御姿

海棠の精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春ををちこちす

思ひ切つて更け行く春の獨りかな

抔と、試みて居るうち、いつしか、うと〳〵眠くなる。恍惚と云ふのが、こんな場合に用ひるべき形容詞かと思ふ。熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覺の際には誰あつて外界を忘るゝものはなからう。只兩域の間に縷の如き幻境が横たはる。醒めたりと云ふには餘り朧にて、眠ると許せんには少しく生氣を剩す。起臥の二界を同瓶裏に盛りて、詩歌の彩管を以て、ひたすらに攪き雜ぜたるが如き狀態を云ふのである。自然の色を夢の手前迄ぼかして、有の儘の宇宙を一段、霞の國へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、ありとある實相の角度を滑らかにすると共に、かく和らげられたる乾坤に、われからと微かに鈍き脈を通はせ

る。地を這ふ烟の飛ばんとして飛び得ざる如く、わが魂の、わが殻を離れんとして離るゝに忍びざる態である。拔け出でんとして逡巡ひ、逡巡ひては拔け出でんとし、果ては魂と云ふ個體を、もぎどうに保ちかねて、氤氳たる瞑氣が散るともなしに四肢五體に纏綿して、依々たり戀々たる心持ちである。

余が寤寐の境にかく逍遙して居ると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしの如く女の影がふうと現はれた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。只心地よく眺めて居る。眺めると云うては些と言葉が强過ぎる。余が閉ぢて居る瞼の裏に幻影の女が斷りもなく滑り込んで來たのである。まぼろしはそろり〳〵と部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、疊の上には人らしい音も立たぬ。閉づる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪の濃い、襟足の長い女である。近頃はやる、ぼかした寫眞を灯影にすかす樣な氣がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべつて暗闇のなかにほのめいた。戸棚が又しまる。疊の波がおのづから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余が眠りは次第に濃やかになる。人の死して、まだ生れ變らない途中はこんなであらう。いつ迄人と馬の相中に寐てゐたかわれは知らぬ。耳元にきゝつと女の笑ひ聲がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落とされて、天下は隅から隅迄明るい。うらゝかな春日が丸窓の竹格子を黒く染め拔いた樣子を見ると、世の中に不思議と云ふものゝ潛む餘地はなさうだ。神祕は十萬億土へ歸つて、三途の川の向う側へ渡つたのだらう。

浴衣の儘、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顏を浮かして居た。洗ふ氣にも、出る氣にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになつたのだらう。晝と夜を界にかう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身體を拭くさへ退儀だから、いゝ加減にして、濡れた儘上がつて、風呂場の戸を内から開けたら、又驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寐られましたか」

戸を開けるのと、此言葉とは殆ど同時にきた。人の居るさへ豫期して居らぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る道さへないうちに、

「さあ、御召しなさい」

と後へ廻つて、ふはりと余の背中へ柔らかい着物をかけた。漸くの事「是は難有う……」丈出して、向き直る途端に、女は二三步退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描寫することに相場が極まつてる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列擧したならば、大藏經と其量を爭ふかも知れぬ。此の辟易すべき多量の形容詞中から、余と三歩の隔りに立つ、體を斜に捩つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めて居る女を、尤も適當に敍すべき用語を拾ひ來つたなら、どれ程の數になるか知れない。然し生れて三十餘年の今日に至るまで未だかつて、かゝる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に歸するさうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思ふ。動けばどう變化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬ所に餘韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に傳ふるのであらう。世上幾多の尊嚴と威儀とは此湛然たる可能力の裏面に伏在して居る。動けばあらはれる。あらはるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、既に一となり、二となり、三となつた曉には、拖泥帶水の陋を遺憾なく示して、本來圓滿の相に戻る譯には行かぬ。此故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北齋の漫畫も全く此動の一字で失敗して居る。動か靜か。是がわれ等畫工の運命を支配する大問題である。古來美人の形容も大抵此二大範疇のいづれにか打ち込む事が出來べき筈だ。

所が此女の表情を見ると、余はいづれとも判斷に迷つた。口は一文字を結んで靜かである。眼は五分のすきさへ見出だすべく動いて居る。顏は下膨れの瓜實形で、豐かに落ち附きを見せてゐるに引き替へて、額は狹苦しくも、こせ附いて、所謂富士額の俗臭を帶びて居る。のみならず眉は兩方から逼つて、中間に數滴の薄荷を點じたる如く、びく〳〵焦慮て居る。鼻ばかりは輕薄に鋭くもない、遲鈍に丸くもない。畫にしたら美しからう。かやうに別れ〳〵の道具が皆一癖あつて、亂調にどや〳〵と余の双眼に飛び込んだのだから迷ふのも無理はない。

元來は靜であるべき大地の一角に陷缺が起つて、全體が思はず動いたが、動くは本來の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどらうとしたのを平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつゞけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有樣が——そんな有樣がもしあるとすれば丁度此女を形容する事が出來る。

それだから輕侮の裏に何となく人に絆りたい氣色が見える。人を馬鹿にした樣子の底に愼み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ、氣を負へば百人の男子を物の數とも思はぬ勢の下から溫和しい情が吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない、悟りと迷ひが一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る體だ。此女の顏に統一の感じのないのは、心に統一のない證據で、心に統

一がないのは、此女の世界に統一がなかつたのだらう。不幸に歴しつけられながら、其不幸に打ち勝たうとしてゐる顔だ。不仕合せな女に違ひない。

「難有う」と繰り返しながら、一寸會釋した。

「ほゝ御部屋は掃除がしてあります。往つて御覧なさい。いづれ後程」

と云ふや否や、ひらりと、腰をひねつて、廊下を輕氣に馳けて行つた。頭は銀杏返しに結つてゐる。白い襟がたぼの下から見える。帶の黒繻子は片側丈だらう。

四

ぽかんと部屋へ歸ると、成程綺麗に掃除がしてある。一寸氣がゝりだから、念の爲戸棚をあけて見る。下には小さな用箪笥が見える。上から友禪の扱帶が半分垂れかゝつて居るのは、誰か衣類でも取り出して、急いで出て行つたものと解釋が出來る。扱帶の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隱和尚の遠良天釜と、伊勢物語の一巻が竝んでる。昨夕のうつゝは事實かも知れないと思つた。

何氣なく座布團の上へ坐ると、唐木の机の上に例の寫生帖が、鉛筆を挟んだ儘、大事さうにあげてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だらうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝烏」とかいたものがある。鉛筆だから、書體はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる、男にしては柔らか過ぎる。おやと又吃驚する。次を見ると「花の影、女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」の下には「御曹子女に化けて朧月」とある。眞似をした積りか、添削した氣か、風流の交はりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思はず首を傾けた。

後程と云つたから、今に飯の時にでも出て來るかも知れない。出て來たら樣子が少しは解るだらう。ときに何時だなと時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寐たものだ。是では午飯丈で間に合はせる方が胃の爲によからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名殘はどの邊かなと眺める。海棠と鑑定したのは、果して海棠であるが、思つたよりも庭は狹い。五六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよささうだ。左は山つゞきの崖に赤松が斜に岩の間から庭の上へさし出して居る。海棠の後には一寸した茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠を春の日に曝して居る。右手は屋の棟で遮られて、見えぬけれども、地勢から察すると、だら〳〵下りに風呂場の方へ落ちて居るに相

違ない。

山が盡きて、岡となり、岡が盡きて、幅三丁程の平地となり、其平地が盡きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ行つて又隆然と起き上がつて、周圍六里の摩耶島となる。是が那古井の地勢である。溫泉場は岡の麓を出來る丈崖へさしかけて、皿の景色を半分庭へ圍ひ込んだ一構であるから、前面は二階でも、後は平屋になる。緣から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は梯子段を無暗に上つたり、下つたり、異な仕掛の家と思つた筈だ。

今度は左側の窓をあける。自然と回む二疊許りの岩のなかに春の水がいつともなく、たまつて靜かに山櫻の影を蘸して居る。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向うに枸杞とも見える生垣があつて、外は濱から岡へ上る畷道か、時々人聲が聞こえる。往來の向うはだら〳〵と南下がりに蜜柑を植ゑて、谷の窮まる所に又大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとは此時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石燈が五六段手にとる樣に見える。大方御寺だらう。

入口の襖をあけて緣へ出ると、欄干が四角に曲がつて、方角から云へば海の見ゆべき筈の所に、中庭を隔てて、表二階の一間がある。わが住む部屋も、欄干に倚れば矢張り同じ高さの二階なのには興が催される。湯壺は地の下にあるのだから、入湯と云ふ點から云へば、余は三層樓上に起臥する譯になる。

家は隨分廣いが、向う二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室臺所は知らず、客間と名がつきさうなのは大抵閉て切つてある。客は、余をのぞくの外殆ど皆無なのだらう。締めた部屋は晝も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。是では表の戸締りさへ、するかしないか解らん。非人情の旅には持つて來いと云ふ屈強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯を食はせる氣色は更にない。漸く空腹を覺えて來たが、空山不見人と云ふ詩中にあると思ふと、一かたけ位儉約しても遺憾はない。晝をかくのも面倒だ、俳句は作らんでも既に俳三昧に入つて居るから、作る丈野暮だ。讀まうと思つて三脚几に括りつけて來た二三冊の書籍もほどく氣にならん。かうやつて、眇々たる春日に背中をあぶつて、緣側に花の影と共に寐ころんで居るのが、天下の至樂である。考へれば外道に墮ちる。動くと危ない。出來るならば鼻から呼吸もしたくない。疊から根の生えた植物の樣にぢつとして二週間許り暮らして見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上がつてくる。近づくのを聞いてゐると、二人ら

しい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人は何も云はず、元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、矢張り昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。

「遅くなりました」と膳を据ゑる。朝食の言譯も何も言はぬ。燒肴に青いものをあしらつて、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め抜かれた海老を沈ませてある。あゝ好い色だと思つて、椀の中を眺めて居た。

「御嫌ひか」と下女が聞く。

「いゝや、今に食ふ」と云つたが實際食ふのは惜しい氣がした。ターナーが或晩餐の席で、皿に盛るサラドを見詰めながら、涼しい色だ、是がわしの用ひる色だと傍の人に話したと云ふ逸事をある書物で讀んだ事があるが、此の海老と蕨の色を一寸ターナーに見せてやりたい。一體西洋の食物で色のいゝものは一つもない。あればサラドと赤大根位なものだ。滋養の點から云つたらどうか知らんが、畫家から見ると頗る發達せん料理である。そこへ行くと日本の獻立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物綺麗に出來る。會席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めた儘歸つても、目の保養から云へば、御茶屋へ上がつた甲斐は充分ある。

「うちに若い女の人が居るだらう」と椀を置きながら、質問をかけた。

「へえ」

「ありや何だい」

「若い奥樣で御座んす」

「あの外にまだ年寄の奥樣が居るのかい」

「去年御亡くなりました」

「旦那さんは」

「居ります。旦那さんの娘さんで御座んす」

「あの若い人がかい」

「へえ」

「御客は居るかい」

「居りません」

「わたし一人かい」

「へえ」

「若い奥さんは毎日何をして居るかい」

「針仕事を……」
「夫から」
「三味を彈きます」
是は意外であつた。面白いから又
「夫から」と聞いて見た。
「御寺へ行きます」と小女郎が云ふ。
是は又意外である。御寺と三味線は妙だ。
「御寺詣りをするのかい」
「いゝえ、和尚樣の所へ行きます」
「和尚さんが三味線でも習ふのかい」
「いゝえ」
「ぢや何をしに行くのだい」
「大徹樣の所へ行きます」
なある程、大徹と云ふのは此額を書いた男に相違ない。此句から察すると何でも禪坊主らしい。

戸棚に遠良天釜があつたのは、全くあの女の所持品だらう。
「此部屋は普段誰が這入つて居る所かね」
「普段は奥樣が居ります」
「それぢや、昨夕、わたしが來る時迄こゝに寢たのだね」
「へえ」
「それは御氣の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのだい」
「知りません」
「それから」
「何で御座んす」
「それから、まだ外に何かするのだらう」
「それから、色々……」
「色々つて、どんな事を」
「知りません」
會話は是で切れる。飯は漸く了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開けたら、中庭の栽込

みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳觀音の樣に下を見詰めて居た。今朝に引き替へて、甚だ靜かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通はないから、相好に斯程な變化を來したものであらうか。昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云つたさうだが、成程人焉んぞ廋さんや、人間のうちで眼程活きて居る道具はない。寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる。途端にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余の方に轉じた。視線は毒矢の如く空を貫いて、會釋もなく余が眉間に落ちる。はつと思ふ間に、小女郎が、又はたと襖を立て切つた。あとは至極呑氣な春となる。

余は又ごろりと寐ころんだ。忽ち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,
Lost ere the kindling of dawn,
To travellers journeying on,

The shutting of thy fair face from my sight.

と云ふ句であつた。もし余があの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢はんと思ふ矢先に、今の樣な一瞥の別れを、魂消ゆる迄に、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだらう。其上に

Might I look on thee in death,
With bliss I would yield my breath.

と云ふ二句さへ、附け加へたかも知れぬ、幸ひ、普通ありふれた、戀とか愛とか云ふ境界は既に通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。然し今の刹那に起つた出來事の詩趣はゆたかに此五六行にあらはれて居る。余と銀杏返しの間柄にこんな切ない思ひはないとしても、二人の今の關係を、此詩の中に適用めて見るのは面白い。或は此詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釋しても愉快だ。二人の間には、ある因果の細い絲で、此詩にあらはれた境遇の一部分が、事實となつて、括りつけられて居る。因果も此位絲が細いと苦にはならぬ。其上、只の絲ではない。空を横切る虹の絲、野邊に柳引く霞の絲、露にかゞやく蜘蛛の絲、切らうとすれば、すぐ切れて、見て居るうちは勝れてうつくしい。萬一此絲が見る間に太くなつて井戸繩の樣にかたくなつたら？そんな危險はない。余は畫工である。先は只の女とは違ふ。

突然襖があいた。寐返りを打つて入口を見ると、因果の相手の其銀杏返しが敷居の上に立つて青磁の鉢を盆に乘せたまゝ佇んで居る。

「また寝て入らつしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたらう。何返も御邪魔をして、ほゝゝゝ」と笑ふ。臆した氣色も、隱す氣色も——恥づる氣色は無論ない。只こちらが先を越されたのみである。

「今朝は難有う」と又禮を云つた。考へると、丹前の禮を是で三返云つた。しかも、三返ながら、只難有うと云ふ三字である。

女は余が起き返らうとする枕元へ早くも坐つた。

「まあ寐て入らつしやい。寐て居ても話しは出來ませう」と、さも氣作に云ふ。余も全くだと考へたから、一先づ腹這ひになつて、兩手で顎を支へ、しばし疊の上へ肘壺の柱を立てる。

「御退屈だらうと思つて、御茶を入れに來ました」

「難有う」又難有うが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が竝んでゐる。余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好きだ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける工合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帶びた煉上げ方は、玉と蠟石の雜種の樣で、甚だ見て心持ちがいゝ。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れた樣につや〳〵して、思はず手を出して撫でて見たくなる。西洋の菓子で、これ程快感を與へるものは一つもない。クリームの色は一寸柔らかだが、少し重苦しい。ジエリは、一見寶石の樣に見えるが、ぶる〳〵顫へて、羊羹程の重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至つては、言語道斷の沙汰である。

「うん、中々美事だ」

「今しがた、源兵衞が買つて歸りました。是ならあなたに召し上がられるでせう」

源兵衞は昨夕城下へ留まつたと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見て居た。どこで誰が買つて來ても構ふ事はない。只美しければ、美しいと思ふ丈で充分滿足である。

「此靑磁の形は大變いゝ。色も美事だ。殆ど羊羹に對して遜色がない」

女はふゝんと笑つた。口元に侮りの波が微かに搖れた。余の言葉を洒落と解したのだらう。成程洒落とすれば、輕蔑される價は慥かにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云ふものだ。

「是は支那ですか」

「何ですか」と相手は丸で靑磁を眼中に置いて居ない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せませうか」
「えゝ、見せて下さい」
「父が骨董が大好きですから、大分色々なものがあります。父にさう云つて、いつか御茶でも上げませう」
茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人程勿體振つた風流人はない。廣い詩界をわざとらしく窮屈に繩張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせゝこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるものは所謂茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかへるだらう。廻れ右、前へ、の連中は悉く大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、丸で趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見當が附かぬ所から、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、是で大方風流なんだらう、と却て眞の風流人を馬鹿にする爲の藝である。
「御茶つて、あの流儀のある茶ですかな」
「いゝえ、流儀も何もありやしません。御厭なら飲まなくつてもいゝ御茶です」
「そんなら、序に飲んでもいゝですよ」

「ほゝゝゝ。父は道具を人に見て頂くのが大好きなんですから……」
「褒めなくつちあ、いけませんか」
「年寄だから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」
「へえ、少しなら褒めて置きませう」
「負けて、澤山御褒めなさい」
「はゝゝゝ、時にあなたの言葉は田舎ぢやない」
「人間は田舎なんですか」
「人間は田舎の方がいゝのです」
「それぢや幅が利きます」
「然し東京に居た事がありませう」
「えゝ、居ました、京都にも居ました。渡りものですから、方々に居ました」
「こゝと都と、どつちがいゝですか」
「同じ事ですわ」
「かう云ふ靜かな所が、却て氣樂でせう」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ち樣一つでどうでもなります。蚤の國が厭になつて、蚊の國へ引つ越しちや、何にもなりません」

「蚤も蚊も居ない國へ行つたら、いゝでせう」

「そんな國があるなら、こゝへ出して御覽なさい。さあ出して頂戴」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出して上げませう」と例の寫生帖をとつて、女が馬へ乘つて、山櫻を見て居る心持ち——無論咄嗟の筆使ひだから、畫にはならない。只心持ち丈をさら〳〵と書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊も居ません」と鼻の前へ突き附けた。驚くか、恥づかしがるか、此樣子では、よもや、苦しがる事はなからうと思つて、一寸氣色を伺ふと、

「まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりぢやありませんか。そんな所が御好きなの、丸で蟹ね」と云つて退けた。余は

「わはゝゝゝ」と笑ふ。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で聲を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと對話をやめて、しばらく耳を峙てたが、一旦鳴き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衞に御逢ひでしたらう」

「ゑゝ」

「長良の乙女の五輪塔を見て入らしつたか」

「ゑゝ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と說明もなく、女はすらりと節もつけずに歌丈述べた。何の爲か知らぬ。

「其歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが敎へましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云ひかけて、是はと余の顏を見たから、余は知らぬ風をして居た。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが來るたびに長良の話をして聞かせてやりました。うた丈は中々覺えなかつたのですが、何遍も聽くうちに、とう〳〵何も蚊も諳誦して仕舞ひました」

「だうれで、六づかしい事を知つてると思つた。——然しあの歌は憐れな歌ですね」

「憐れでせうか。私ならあんな歌は詠みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないぢやありませんか」

「成程つまらないですね。あなたなら如何しますか」

「どうするつて、譯ないぢやありませんか。さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする計りですわ」

「兩方ともですか」

「えゝ」

「えらいな」

「えらかあない、當り前ですわ」

「成程夫ぢや蚊の國へも、蚤の國へも、飛び込まずに濟む譯だ」

「蟹の樣な思ひをしなくつても、生きてゐられるでせう」

ほーう、ほけきやうと忘れかけた鶯が、いつ勢を盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。

一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逸しまにして、ふくらむ咽喉の底を震はして、小さき口の張り裂くる許りに、

ほーう、ほけきよーう。ほーう、ほけつーきよう！

と、つゞけ樣に囀る。

「あれが本當の歌です」と女が余に教へた。

五

「失禮ですが旦那は、矢つ張り東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見りやあ、——第一言葉でわかりまさあ」

「東京は何所だか知れるかい」

「さうさね。東京は馬鹿に廣いからね。——何でも下町ぢやねえやうだ。山の手だね。山の手は麹町かね。え？それぢや、小石川？でなければ牛込か四谷でせう」

「まあそんな見當だらう。よく知つてるな」

「かう見えて、私も江戸つ子だからね」

「道理で生粋だと思つたよ」

「えへゝゝゝ。からつきし、どうも、人間もかうなつちや、みじめですぜ」

「何で又こんな田舍へ流れ込んで來たのだい」

「ちげえねえ、旦那の仰しやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食ひ詰めつちまつて……」

「固から髮結床の親方かね」

「親方ぢやねえ、職人さ。え？所かね。所は神田松下町でさあ。なあに猫の額見た樣な小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえ筈さ。あすこに龍閑橋てえ橋がありませう。え？そいつも知らねえかね。龍閑橋や、名代な橋だがね」

「おい、もう少し、石鹸を塗けて呉れないか、痛くつて、いけない」

「痛うがすかい。私や癇性でね、どうも、かうやつて、逆剃をかけて、一本々々髭の穴を掘らなくつちや、氣が濟まねえんだから、——なあに今時の職人なあ、剃るんぢやねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」

「我慢はさつきから、もう大分したよ。御願ひだから、もう少し湯か石鹸をつけとくれ」

「我慢しきれねえかね。そんなに痛かあねえ筈だが。全體、髭があんまり延び過ぎてるんだ」

やけに頬の肉をつまみ上げた手を、殘念さうに放した親方は、棚の上から、薄つ片な赤い石鹸を取り卸して、水のなかに一寸浸したと思つたら、夫なり余の顔をまんべんなく一應撫で廻した。裸石鹸を顔へ塗り附けられた事はあまりない。然もそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きかと考へると、餘りぞつとしない。

既に髪結床である以上は、御客の權利として、余は鏡に向はなければならん。然し余はさつきから此權利を放棄したく考へて居る。鏡と云ふ道具は平に出來て、なだらかに人の顔を寫さなくては義理が立たぬ。もし此性質が具はらない鏡を懸けて、之に向へと强ひるならば、强ひるものは下手な寫眞師と同じく、向ふものの器量を故意に損害したと云はなければならぬ。虛榮心を挫くのは修養上一種の方便かも知れぬが、何も己の眞價以下の顔を見せて、是があなたですよと、此方を侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合ふべく餘儀なくされて居る鏡は慥かに最前から余を侮辱して居る。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元迄裂ける。仰向くと墓蛙を前から見た樣に眞平に壓し潰され、少しこゞむと福祿壽の祈誓兒の樣に頭がせり出してくる。苟も此鏡に對する間は一人で色々な化物を兼勤しなくてはならぬ。寫るわが顔の美術的ならぬは先づ我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剝げ落ちて、光線が通り拔ける模樣抔を總合して考へると、此道具その物からが醜體を極めて居る。小人から罵詈されるとき、罵詈其自身は別に痛痒を感ぜぬが、其小人の面前に起臥しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だらう。

其上此親方が只の親方ではない。そとから覗いたときは、胡坐をかいて、長煙管で、おもちやの日英同盟國旗の上へ、しきりに煙草を吹きつけて、さも退屈氣に見えたが、這入つて、わが首

の所置を託する段になつて驚いた。髭を剃る間は首の所有權は全く親方の手にあるのか、將た幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑ひ出した位、容赦なく取り扱はれる。余の首が肩の上に釘附けにされて居るにしても是では永く持たないね。

彼は髪剃を揮ふに當つて、毫も文明の法則を解して居らん。頬にあたる時はがりゝと音がした。揉み上げの所ではぎりと動脈が鳴つた。顋のあたりに利刃がひらめく時分にはごり〳〵、ごりごりと霜柱を踏みつける樣な怪しい聲が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方を以て自任して居る。

最後に彼は醉つ拂つてゐる。旦那えと云ふたんびに妙な臭ひがする。時々は異な瓦斯を余が鼻柱へ吹き掛ける。是ではいつ何時、髪剃がどう間違つて、何所へ飛んで行くか解らない。使ふ當人にさへ判然たる計畫がない以上は、顔を貸した余に推察の出來よう筈がない。得心づくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は云はない積りだが、急に氣が變つて咽喉笛でも掻き切られては事だ。

「石鹸なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云ひながら親方は裸石鹸を、裸の儘棚の上へ放り出すと、石鹸は親方の命令に背いて地面の上へ轉がり落ちた。

「旦那え、餘り見受けねえ樣だが、何ですかい、近頃來なすつたのかい」

「二三日前來た計りさ」

「へえ、どこに居るんですい」

「志保田に逗まつてるよ」

「うん、あすこの御客さんですか。大方そんな事たらうと思つてた。實あ、私もあの隱居さんを賴つて來たんですよ。——なにね、あの隱居が東京に居た時分、わつしが近所にゐて、——それで知つてるのさ。いゝ人でさあ。ものの解つたね。去年御新造が死んぢまつて、今ぢや道具ばかり捻くつてるんだが——何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。賣つたら餘程な金目だらうつて話さ」

「綺麗な御孃さんが居るぢやないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何がつて。旦那の前だが、あれで出返りですぜ」

「さうかい」

「さうかい所の騒ぎぢやねえんだね。全體なら出て來なくつてもいゝ所をさ。——銀行が潰れて贅澤が出來ねえつて、出ちまつたんだから、義理が悪いやね。隱居さんがあゝして居るうちはいゝが、もしもの事があつた日にや、煩返しがつかねえ譯になりまさあ」

「さうかな」

「當り前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にありまさあ。遊びに行つて御覽なさい。景色のいゝ所ですよ」

「おい、もう一遍石鹸をつけてくれないか。又痛くなつて來た」

「よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭ぢや、三日に一度は是非剃を當てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃で痛けりや、何所へ行つたつて、我慢出來つこねえ」

「是から、さうしよう。何なら毎日來てもいゝ」

「そんなに長く逗留する氣なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事た。碌でもねえものに引つかゝつて、どんな目に逢ふか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は面はいゝ樣だが、本當はき印ですぜ」

「なぜ」

「なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて云つてるんでさあ」

「そりや何かの間違ひだらう」

「だつて、現に證據があるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」

「おれは大丈夫だが、どんな證據があるんだい」

「可笑しな話さね。まあゆつくり、煙草でも呑んで御出でなせえ話すから。——頭あ洗ひませうか」

「頭はよさう」

「頭垢丈落として置くかね」

親方は垢の溜まつた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に竝べて、斷りもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此爪が、黒髪の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する。余が頭に何十萬本の髪の毛が生えて居るか知らんが、ありとある

毛が悉く根こぎにされて、殘る地面がべた一面に蚯蚓腫れにふくれ上がつた上、餘勢が地盤を通して、骨から腦味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を掻き廻した。

「どうです、好い心持ちでせう」

「非常な辣腕だ」

「え？かうやると誰でも薩張りするからね」

「首が抜けさうだよ」

「そんなに倦怠うがすかい。全く陽氣の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身體がなまけやがつて——まあ一ぷく御上がんなさい。一人で志保田に居ちや、退屈でせう。ちと話しに御出でなせえ。どうも江戸つ子は江戸つ子同志でなくつちや、話しが合はねえものだから。何ですかい、矢つ張りあの御嬢さんが、御愛想に出てきますかい。どうも薩ばし、見境のねえ女だから困つちまはあ」

「御嬢さんが、どうとか、爲た所で頭垢が飛んで、首が抜けさうになつたつけ」

「違えねえ、がんがらがんだから、殻切、話しに締りがねえつたらねえ。——そこで其坊主が逆せちまつて……」

「其坊主たあ、どの坊主だい」

「觀海寺の納所坊主がさ……」

「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て來ないんだ」

「さうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出來さうな坊主だつたが、そいつが御前さん、レコに參つちまつて、とう〳〵文をつけたんだ。——おや待てよ。口説いたんだつけかな。いんにや文だ。文に違えねえ。すると——かうつと——何だか、行きさつが少し變だぜ。うん、さうか、矢つ張りさうか。するてえと奴さん、驚いちまつてからに……」

「誰が驚いたんだい」

「女がさ」

「女が文を受け取つて驚いたんだね」

「所が驚く樣な女なら、殊勝らしいんだが、驚くどころぢやねえ」

「ぢや誰が驚いたんだい」

「口説いた方がさ」

「口説かないのぢやないか」

「えゝ、焦心つてえ。間違つてらあ。文をもらつてさ」
「それぢや矢つ張り女だらう」
「なあに男がさ」
「男なら、其坊主だらう」
「えゝ、其坊主がさ」
「坊主がどうして驚いたのかい」
「どうしてつて、本堂で和尚さんと御經を上げてると、突然あの女が飛び込んで來て――ウフ……。どうしても狂印だね」
「どうかしたのかい」
「そんなに可愛いなら、佛樣の前で、一所に寐ようつて、出し抜けに、泰安さんの頸つ玉へかじりついたんでさあ」
「へえゝ」
「面喰らつたなあ、泰安さ。氣狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とう〳〵、其晩こつそり姿を隱して死んぢまつて……」

「死んだ？」
「死んだらうと思ふのさ。生きちや居られめえ」
「何とも云へない」
「さうさ、相手が氣狂ぢや、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」
「中々面白い話だ」
「面白いの、面白くないのつて、村中大笑ひでさあ。所が當人丈は、根が氣が違つてるんだから、洒啞々々〳〵して平氣なもんで――なあに旦那の樣に確然してゐりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大變な目に逢ひますよ」
「ちつと氣を附けるかね。はゝゝゝゝ」
生溫い磯から、鹽氣のある春風がふはり〳〵と來て、親方の暖簾を眠たさうに煽る。身を斜にして其下をくゞり拔ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向うの家では六十許りの爺さんが、軒下に蹲踞り乍ら、だまつて貝をむいて居る。かちやりと、小刀があたる度に、赤い身が笊のなかに隱れる。殼はきらりと光を放つて、二尺あまりの陽炎を向うへ横切る。丘の如くに堆く、積み上げられた、其殼は牡蠣か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた幾分は、砂川の底に落ちて、

浮世の表から、暗い國へ葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考ふる暇さへなく、唯空しき殻を陽炎の上へ放り出す。彼の笊には支ふべき底なくして、彼の春の日は無盡藏に長閑と見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、濱の方へ春の水をそゝぐ。春の水が春の海と出合ふあたりには、參差として幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微溫を與へつゝある かと怪しまれる。その間から、鉈刀を溶かして、氣長にのたくらせた樣に見えるのが海の色だ。

此景色と此親方とは到底調和しない。もし此親方の人格が强烈で四邊の風光と拮抗する程の影響を余の頭腦に與へたならば、余は兩者の間に立つて頗る圓枘方鑿の感に打たれただらう。幸ひにして親方は左程偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸つ子でも、どれ程たんかを切つても、此の渾然として駘蕩たる天地の大氣象には叶はない。滿腹の饒舌を弄して、あく迄此調子を破らうとする親方は、早くも微塵となつて、恰々たる春光の裏に浮游して居る。矛盾とは、力に於て、量に於て、若しくは意氣體軀に於て氷炭相容るゝ能はずして、しかも同程度に位する物若しくは人の間に在つて始めて、見出だし得べき現象である。兩者の間隔が甚しく懸絶するときは、此矛盾は漸く漸盡磨滅して、却て大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足となつて才子が活動し、才子の股肱となつて味者が活動し得るのは是が爲である。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じてゐる。長閑な春の感じを壞すべき筈の彼は、却て長閑な春の感じを刻意に添へつゝある。余は思はず彌生半ばに呑氣な彌次と近附になつた樣な氣持ちになつた。此の極めて安價なる氣燄家は、太平の象を具したる春の日に尤も調和せる一彩色である。

かう考へると、此親方も中々畫にも、詩にもなる男だから、とうに歸るべき所を、わざと尻を据ゑて四方八方の話しをして居た。所へ暖簾を滑つて小さな坊主頭が

「御免、一つ剃つて貰はうか」

と這入つて來る。白木綿の着物に同じ丸絎の帶をしめて、上から蚊帳の樣に粗い法衣を羽織つて、頗る氣樂に見える小坊主であつた。

「了念さん。どうだい、此間あ道草あ、食つて、和尙さんに叱られたらう」

「いんにや、褒められた」

「使に出て、途中で魚なんか、とつて居て、了念は感心だつて、褒められたのかい」

「若いに似ず了念は、よく遊んで來て感心ぢや云うて、老師が褒められたのよ」

「道理で頭に瘤が出來てらあ。そんな不作法な頭あ、剃るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘辨するから、此次から、捏ね直して來ねえ」

「捏ね直す位なら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はゝゝゝ頭は凸凹だが、口丈は達者なもんだ」

「腕は鈍いが、酒丈强いのは御前だろ」

「篦棒め、腕が鈍いつて……」

「わしが云うたのぢやない。老師が云はれたのぢや。さう怒るまい。年甲斐もない」

「へン、面白くもねえ。——ねえ、旦那」

「えゝ？」

「全體坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがつて、屈託がねえから、自然に口が達者になる譯ですかね。こんな小坊主迄中々口幅つてえ事を云ひますぜ——おつと、もう少し頭を寐かして——寐かすんだてえのに、——言ふ事を聽かなけりや、切るよ、いゝか、血が出るぜ」

「此位な辛抱が出來なくつて坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなつとるがな」

「まだ一人前ぢやねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだつけな、御小僧さん」

「泰安さんは死にはせんがな」

「死なねえ？　はてな。死んだ筈だが」

「泰安さんは、その後發憤して、陸前の大梅寺へ行つて、修行三昧ぢや。今に智識になられよう。結構な事よ」

「何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃げをして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく氣をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印は矢つ張り和尚さんの所へ行くかい」

「狂印と云ふ女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌擂だ。行くのか、行かねえのか」

「狂印は來んが、志保田の娘さんなら來る」

「いくら、和尚さんの御祈禱でもあれ計りや、癒るめえ。全く先の旦那が祟つてるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めて居られる」

「石段をあがると、何でも逆様だから叶はねえ。和尚さんが、何て云つたつて、氣狂は氣狂だらう。——さあ剃れたよ。早く行つて和尚さんに叱られて來ねえ」

「いやもう少し遊んで行つて賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄この乾屎橛」

「何だと？」

青い頭は既に暖簾をくゞつて、春風に吹かれて居る。

六

夕暮の机に向ふ。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞ふ境を、幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩ひにはならぬ。今日は一層靜かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを殘して、立ち退いたかと思はれる。立ち退いたとすれば唯の所へ立ち退きはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近附いて、舵をとるさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、果ては帆みづからが、いづこに己を雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思はれる。夫でなければ卒然と春のなかに消え失せて、是迄の四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名殘を留めぬ樣になつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黃を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。又は永き日を、かつ永くする虹のつとめを果たしたる後、悉に凝る甘き露を吸ひ損ねて、落椿の下に伏せられ乍ら、世を香ばしく眠つて居るかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

空しき家を、空しく抜ける春風の、抜けて行く當でもない。自ら來りて、自ら去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支へたる余の心も、わが住む部屋の如く空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き抜けるであらう。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも起る。戴くは天と知る故に、稻妻の米噛に震ふ怖れも出來る。人と爭はねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免れぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の網を渡らねばならぬ身には、事實の戀は儘である。目に見る富は土である。握る名と奪へる譽とは、小賢しき蜂が甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜の如きもので

あらう。所謂樂は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。但詩人と畫客なるものあつて、飽くまで此待對世界の精華を嚙んで、徹骨徹髓の清きを知る。霞を餐し、露を嚥み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼等の樂は物に着するのではない。同化して其物になるのである。其物になり濟ました時に、我を樹立すべき餘地は茫々たる大地を極めても見出だし得ぬ。自在に泥團を放下して、破笠裏に無限の青嵐を盛る。いたづらに此境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭兒を鬼嚇して、好んで高く標置するが爲ではない。只這裏の福音を逃べて、緣ある衆生を麾くのみである。有體に云へば詩境と云ひ、畫界と云ふも皆人々具足の道である。春秋に指を折り盡して、白頭に呻吟するの徒と雖も、一生を回顧して、閱歷の波動を順次に點檢し來るとき、嘗ては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れしし、拍手の興を喚び起こす事が出來よう。出來ぬと云はば生き甲斐のない男である。

去れど一事に卽し、一物に化するのみが詩人の感興とは云はぬ。ある時は一瓣の花に化し、あるときは一双の蝶に化し、あるはウオーヅウオースの如く、一團の水仙に化して、心を澤風の裏に撩亂せしむる事もあらうが、何とも知れぬ四邊の風光にわが心を奪はれて、わが心を奪へるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣に觸るゝと云ふだらう。ある人は無絃の琴を靈臺に聽くと云ふだらう。又ある人は知りがたく、解しがたきが故に無限の域に儃佪して、縹緲のちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云ふも皆其人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぽかんとした心裡の狀態は正にこれである。

余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥かに何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。去れども吾は動いて居る。世の中に動いても居らぬ、世の外にも動いても居らぬ。只何となく動いて居る。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、只恍惚と動いて居る。

强ひて說明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて桃源の日で蒸發せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覺せぬうちに飽和されて仕舞つたと云ひたい。普通の同化には刺激があらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、窈然として名狀しがたい樂がある。風に揉まれて上の空なる波を起こす、輕薄で騷々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸迄動いてゐる潢洋たる蒼海の有樣と形容する事が出來る。只夫程に

活力がない計りだ。然しそこに反つて幸福がある。偉大なる活力の發現は、此活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴なはぬ。常よりは淡きわが心の、今の狀態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脫却して居る。淡しとは單に捕へ難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は尤も此境を切實に言ひ了せたものだらう。

此境界を畫にして見たらどうだらうと考へた。然し普通の畫にはならないに極まつてゐる。われ等が俗に畫と稱するものは、只眼前の人事風光を有りの儘なる姿として、若しくは之をわが審美眼に漉過して、繪絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、畫の能事は終つたものと考へられて居る。もし此上に一頭地を拔けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、畫布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕へたる森羅の裡に寓するのが此種の技術家の主意であるから、彼等の見たる物象觀が明瞭に筆端に迸つて居らねば、畫を製作したとは云はぬ。己はしか〳〵の事を、しか〳〵に觀、しか〳〵に感じたり、その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古來の傳說に支配せられたるにあらず、しかも尤も正しくして、尤も美しきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢てせぬ。

此二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。去れど今、わが描かんとする題目は、左程に分明なものではない。あらん限りの感覺を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方圓の形、紅綠の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出だしかねる。わが感じは外から來たのではない、たとひ來たとしても、わが視界に橫たはる、一定の景物でないから、是が原因だと指を擧げて明かに人に示す譯に行かぬ。あるものは只心持ちである。此心持ちを、どうあらはしたら畫になるだらう——否此心持ちを如何なる具體を藉りて、人の合點する樣に髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の畫は感じはなくても物さへあれば出來る。第二の畫は物と感じと兩立すれば出來る。第三に至つては存するものは只心持ち丈であるから、畫にするには是非共此心持ちに恰好なる對象を擇ばなければならん。然るに此對象は容易に出て來ない。出て來ても容易に纏まらない。纏まつても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。從つて普通の人から見れば畫とは受け取れない。描いた當人も自然界の局部が再現したものとは認めて居らん、只感興のさした刻下の心持ちを幾分でも傳へて、多少の生命を惝怳しがたきムードに與ふれば大成功と心得て居る。

古來から此難事業に全然の績を收め得たる畫工があるかないか知らぬ。ある點迄此流派に指を染め得たるものを擧ぐれば、文與可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の畫家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を占めて居るから、此種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは果して幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村等の力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純で且あまりに變化に乏しい。筆力の點から云へば到底此等の大家に及ぶ譯はないが、今わが畫にして見ようと思ふ心持ちはもう少し複雜である。複雜である丈にどうも一枚のなかへは感じが收まりかねる。頰杖をやめて、兩腕を机の上に組んで考へたが矢張り出て來ない。色、形、調子が出來て、自分の心が、あゝ此處に居たなと、忽ち自己を認識する樣にかゝなければならない。生き別れをした吾子を尋ね當てる爲、六十餘州を回國して、寢ても寤めても、忘れる間がなかつたある日、十字街頭に不圖邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ、此所に居た、と思ふ樣にかかなければならない。それが六づかしい。此調子さへ出れば、人が見て何と云つても構はない。畫でないと罵られても恨はない。苟も色の配合が此心持ちの一部を代表して、線の曲直が此氣合の幾分を表現して、全體の配置が此風韻のどれ程かを傳へるならば、形にあらはれたものは、牛であれ馬であれ、乃至は牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭はない。厭はないがどうも出來ない。寫生帖を机の上へ置いて、兩眼が帖のなかへ落ち込む迄、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考へた。こんな抽象的な興趣を畫にしようとするのが、抑もの間違ひである。人間にさう變りはないから、多くの人のうちには屹度自分と同じ感興に觸れたものがあつて、此感興を何等の手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすれば其手段は何だらう。

忽ち「音樂」の二字がぴかりと眼に映つた。成程音樂は斯かる時、斯かる必要に逼られて生れた自然の聲であらう。樂は聽くべきもの、習ふべきものであると、始めて氣が附いたが、不幸にして、その邊の消息は丸で不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云ふ男は、時間の經過を條件として起る出來事を、詩の本領である如く論じて、詩畫は不一にして兩樣なりとの根本義を立てた樣に記憶するが、さう詩を見ると、今余の發表しようとあせつて居る境界も到底物にならうさうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の狀況には、時間はあるかも知れないが、時間の流に沿うて、遞次に展開すべき出來事の内容がない。一が去り、二が來り、二が消えて三が生まるゝが

爲に嬉しいのではない。初めから窈然として同所に把住する趣で嬉しいのである。既に同所に把住する以上は、よし之を普通の言語に飜譯した所で、必ずしも時間の間に材料を按排する必要はあるまい。矢張り繪畫と同じく空間的に景物を配置したのみで出來るだらう。只如何なる景情を詩中に持ち來つて、此曠然として倚託なき有樣を寫すかが問題で、既に之を捕へ得た以上はレッシングの說に從はんでも詩として成功する譯だ。ホーマーがどうでも、ヴージルがどうでも構はない。もし詩が一種のムードをあらはすに適して居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出來事の助けを藉らずとも、單純に空間的なる繪畫上の要件を充たしさへすれば、言語を以て描き得るものと思ふ。

議論はどうでもよい。ラオコーン抔は大概忘れて居るのだから、よく調べたら、此方が怪しくなるかも知れない。兎に角、畫にしそくなつたから、一つ詩にして見ようと、寫生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖つた所を、どうにか運動させたい計りで、毫も運動させる譯に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉迄出かゝつて居るのに、出てくれない樣な氣がする。そこで諦めると、出損なつた名は、遂に腹の底へ收まつて仕舞ふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さら〳〵して、箸に手應へがないものだ。そこを辛抱すると、漸く粘着が出て、攪き淆ぜる手が少し重くなる。それでも構はず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。仕舞ひには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、爭つて箸に附着してくる。詩を作るのは正に是だ。

手掛りのない鉛筆が少しづゝ動く樣になるのに勢を得て、彼是二三十分したら、

青春二三月。愁隨芳草長。閑花落空庭。素琴橫虛堂。蠟蛸掛不動。篆煙繞竹梁。

と云ふ六句丈出來た。讀み返して見ると、みな畫になりさうな句計りである。是なら始めから、畫にすればよかつたと思ふ。なぜ畫よりも詩の方が作り易かつたかと思ふ。こゝ迄出たら、あとは大した苦もなく出さうだ。然し畫に出來ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末とう〳〵、

獨坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。會得一日靜。正知百年忙。遐懷寄何處。緬邈白雲鄉。

と出來た。もう一返最初から讀み直して見ると、一寸面白く讀まれるが、どうも自分が今しがた入つた神境を寫したものとすると、索然として物足りない。序だから、もう一首作つて見ようか

と、鉛筆を握つた儘、何の氣もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間をちらりと、綺麗な影が通つた。はてな。

余が眼を轉じて、入口を見たときは、綺麗なものが、既に引き開けた襖の陰に半分かくれかけて居た。しかも其姿は余が見ぬ前から、動いて居たものらしく、はつと思ふ間に通り越した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反對の方から、逆にあらはれて來た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の緣側を寂然として歩行いて行く。余は覺えず鉛筆を落として、鼻から吸ひかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天からずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに歸る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空氣のなかに蕭寥と見えつ、隱れつする。

女は固より口も利かぬ。傍目も振らぬ。緣に引く裾の音さへおのが耳に入らぬ位靜かに歩行いて居る。腰から下にぱつと色づく裾模樣は、何を染め拔いたものか、遠くて解らぬ。只無地と模樣のつながる中が、おのづから暈されて、夜と晝との境の如き心地である。女は固より夜と晝とにも呼び返したくなる。假の眠りから、いつの間とも心附かぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかゝつた煩惱の綱を無暗に引かるゝ樣で苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んで吳れるな、穩やかに寢かして吳れと思ふかも知れぬ。それでも、われ〳〵は呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらはれたなら、呼びかけて、うつゝの裡から救つてやらうかと思つた。然し夢の樣に、三尺の幅を、すうと拔ける影を見るや否や、何だか口が利けなくなる。今度はと心を定めて居るうちに、すうと苦もなく通つて仕舞ふ。なぜ何とも云へぬかと考ふる途端に、女は又通る。こちらに窺ふ人があつて、其人が自分の爲にどれ程やきもき思うて居るか、微塵も氣に掛からぬ有樣で通る。面倒にも氣の毒にも、初手から、余の如きものに、氣をかねて居らぬ有樣で通る。今度はと思うて居るうちに、こらへかねた雲の層が、持ち切れぬ雨の絲を、しめやかに落とし出して、女の影を、蕭々と封じ了る。

七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。

三疊へ着物を脫いで、段々を、四つ下りると、八疊程な風呂場へ出る。石に不自由せぬ國と見

えて、下は御影で敷き詰めた、眞中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋程な湯槽を据ゑる。槽とは云ふものゝ矢張り石で疊んである。鑛泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへふくんで見るが別段の味も臭もない。病氣にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固より別段の持病もないから、實用上の價値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。只這入る度に考へ出すのは、白樂天の溫泉水滑洗凝脂と云ふ句丈である。溫泉と云ふ名を聞けば必ず此句にあらはれた樣な愉快な氣持ちになる。又此氣持ちを出し得ぬ溫泉は、溫泉として全く價値がないと思つてる。此理想以外に溫泉に就いての注文は丸でない。

すぽりと浸かると、乳のあたり迄這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の緣を綺麗に越して居る。春の石は乾くひまなく濡れて、あたゝかに、踏む足の、心は穩やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤ほす程のしめやかさであるが、軒のしづくは、漸く繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞こえる。立籠められた湯氣は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さへあれば、節穴の細きを厭はず洩れ出でんとする氣色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく霞は長閑に、夕餉炊く、人の烟は青く立つて、大いなる空に、わが果敢なき姿を託す。樣々の憐れはあるが、春の夜の溫泉の曇り計りは、浴するものの肌を、柔らかにつゝんで、古き世の男かと、われを疑はしむる。眼に寫るものゝ見えぬ程、濃くまゐはりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己を見出だす樣に、淺きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り盡すとも此烟から出す事はならぬ顏に、四方よりわれ一人を、溫かき虹の中に埋め去る。酒に醉ふと云ふ言葉はあるが、烟に醉ふと云ふ語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使へぬ、霞には少し強過ぎる。只此靄に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥當なるを覺える。

余は湯槽のふちに仰向けの頭を支へて、透き徹る湯のなかの輕き身體を、出來る丈抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふはり、ふはりと魂がくらげの樣に浮いて居る。世の中もこんな氣になれば樂なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、溫泉のなかで、溫泉と同化して仕舞ふ。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂迄流して居れば、基督の御弟子となつたより難有い。成程此調子で考へると、土左衞門は風流である。スキンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤも、かう觀察すると大分美しくなる。何であん

な不愉快な所を擇んだものかと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り畫になるのだ。水に浮んだ儘、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘の姿で苦なしに流れる有樣は美的に相違ない。夫で兩岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顏の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、屹度畫になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆ど神話か比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より、全幅の精神をうち壞すが、全然色氣のない平氣な顏では人情が寫らない。どんな顏をかいたら成功するだらう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衞門をかいて見たい。然し思ふ樣な顏はさう容易く心に浮んで來さうもない。

湯のなかに浮いた儘、今度は土左衞門の贊を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小聲に誦しつゝ漫然と浮いて居ると、何所かで彈く三味線の音が聞こえる。美術家だのにと云はれると恐縮するが、實の所、余が此樂器に於ける知識は頗る怪しいもので二が上がらうが、三が下がらうが、耳には餘り影響を受けた試しがない。しかし、靜かな春の夜に、雨さへ興を添へる、山里の湯槽の中で、魂迄春の溫泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。遠いから何を唄つて、何を彈いて居るか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ち附いて居る所から察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聽かれさうな太棹かとも思ふ。

子供の時分、門前に萬屋と云ふ酒屋があつて、そこにお倉さんと云ふ娘が居た。此お倉さんが、靜かな春の晝過ぎになると、必ず長唄の御浚ひをする。御浚ひが始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪餘りを前に控へて、三本の松が、客間の東側に竝んで居る。此松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形づくつてゐた。子供心に此松を見ると好い心持ちになる。松の下に黑くさびた鐵燈籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず

屋の頑固爺の樣にかたく坐つて居る。余は此燈籠を見詰めるのが大好きであつた。燈籠の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顏に、獨り匂うて獨り樂しんで居る。余は此草のなかに、纔かに膝を容るゝの席を見出だして、ぢつと、しやがむのが此時分の癖であつた。此の三本の松の下に、此燈籠を睨めて、此草の香を嗅いで、さうしてお倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。

お倉さんはもう赤い手絡の時代さへ通り越して、大分と世帶じみた顏を、帳場へ曝してるだらう。聲とは折合がいゝか知らん。燕は年々歸つて來て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしてゐるか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離せない。

三本の松は未だに好い恰好で殘つて居るかしらん。鐵燈籠はもう壞れたに相違ない。春の草は、昔しやがんだ人を覺えて居るだらうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知らう筈がない。お倉さんの旅の衣は鉛懸のと云ふ、日毎の聲もよも聞き覺えがあるとは云ふまい。

三味の音が思はぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む、頑是なき小僧と、成り濟ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。誰か來たなと、身を浮かした儘、視線丈を入口に注ぐ。湯槽の緣の最も入口から、隔たりたる

に頭を乘せて居るから、槽に下る段々は、間二丈を隔てて斜に余が眼に入る。然し見上げたる余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音のみが聞こえる。三味線は何時の間にか已んで居た。

やがて階段の上に何物かあらはれた。廣い風呂場を照らすものは、只一つの小さき釣り洋燈のみであるから、此隔りでは澄み切つた空氣を控へてさへ、確と物色はむづかしい。況して立ち上がる湯氣の、濃やかなる雨に抑へられて、逃場を失ひたる今宵の風呂に、立つを誰とは固より定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも聲は掛けられぬ。

黒いものが一歩を下へ移した。踏む石は天鵞絨の如く柔らかと見えて、足音を證に之を律すれば、動かぬと評しても差し支へない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は畫工丈あつて人體の骨格に就いては、存外視覺が鋭敏である。何とも知れぬものの一段動いた時、余は女と二人、此風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらはれた。漲り渡る湯烟の、やはらかな光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥

に、漾はす黒髪を雲とながして、あらん限りの脊丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、禮儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは悉く、わが腦裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい畫題を見出だし得たとのみ思つた。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世佛國の畫家が命と頼む裸體畫を見る度に、あまりに露骨な肉の美を、極端迄描き盡さうとする痕迹が、あり〳〵と見えるので、どことなく氣韻に乏しい心持ちが、今迄われを苦しめてならなかつた。然し其折々はたゞどことなく下品だと評する迄で、何故下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答へを得るに煩悶して今日に至つたのだらう。肉を蔽へば、うつくしきものが隱れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは只かくさぬと云ふ卑しさに、技巧を留めて居らぬ。衣を奪ひたる姿を、其儘に寫す丈にては、物足らぬと見えて、飽く迄も裸體を、衣冠の世に押し出さうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸に凡ての權能を附與せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、ど迄も進んで、只管に、裸體であるぞと云ふ感じを強く描出しようとする。技巧が此極端に達したる時、人は其の觀者を強ふるを墮とする。うつくしきものを、彌が上に、うつくしくせんと焦るとき、うつくしきものは却て其度を減ずるが例である。人事に就いても滿は損を招くとの諺は是が爲である。

放心と無邪氣とは餘裕を示す。餘裕は畫に於て、詩に於て、もしくは文章に於て、必須の條件である。今代藝術の一大弊竇は、所謂文明の潮流が、徒らに藝術の士を驅つて、拘々として隨處に齷齪たらしむるにある。裸體畫は其好例であらう。都會に藝妓と云ふものがある。色を賣りて、人に媚びるを商賣にして居る。彼等は嫖客に對する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目錄は此藝妓に似たる裸體美人を以て充滿して居る。彼等は一秒時も、わが裸體なるを忘るゝ能はざるのみならず、全身の筋肉をむづつかして、わが裸體なるを觀者に示さんと力めて居る。

今余が面前に娉婷と現はれたる姿には、一塵も此俗埃の眼に遮るものを帶びて居らぬ。常の人の纏へる衣裳を脫ぎ捨てたる樣と云へば既に人界に墮在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起こしたるが如く自然である。

室を埋むる湯烟は、埋めつくしたる後から、絕えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し擴げて、部屋一面の虹霓の世界が濃やかに搖れるなかに、朦朧と、黒きかとも思はるゝ程の髮を暈して、眞白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて來る。其輪廓を見よ。

頸筋を輕く內輪に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るゝ末は五本の指と分かれるのであらう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、又滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後へ拔いて、勢の盡くるあたりから、分かれた肉が平衡を保つ爲に少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、凡ての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する。世の中に是程錯雜した配合はない、是程統一のある配合もない。是程自然で、是程柔らかで、是程抵抗の少い、是程苦にならぬ輪廓は決して見出だせぬ。

しかも此姿は普通の裸體の如く露骨に、余が眼の前に突きつけられては居らぬ。凡てのものを幽玄に化する一種の靈氛のなかに髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかして居るに過ぎぬ。片鱗を潑墨淋漓の間に點じて、虬龍の怪を、楮毫の外に想像せしむるが如く、藝術的に觀じて申し分のない、空氣と、あたゝかみと、冥邈なる調子とを具へて居る。六々三十六鱗を丁寧に描きたる龍の、滑稽に落つるが事實ならば、赤裸々の肉を淨洒々に眺めぬうちに神往の餘韻はある。余は此輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り圍まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一歩を踏み出せば、折角の嫦娥が、あはれ、俗界に墮落するよと思ふ刹那に、綠の髪は、波を切る靈龜の尾の如くに風を起こして、莽と靡いた。渦捲く烟を劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホヽヽヽと鋭く笑ふ女の聲が、廊下に響いて、靜かなる風呂場を次第に向うへ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ盡槽の中に突つ立つ。驚いた波が、胸へあたる。緣を越す溫泉の音がざあ〳〵と鳴る。

八

御茶の御馳走になる。相客は僧一人、觀海寺の和尚で名は大徹と云ふさうだ。俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き當たつて、左へ折れた行き留りにある。大きさは六疊もあらう。大きな紫檀の机を眞中に据ゑてあるから、思つたより狹苦しい。それへと云ふ席を見ると、布團の代りに花毯が敷いてある。無論支那製だらう。眞中を六角に仕切つて、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周圍は鐵色に近い藍で、四隅に唐草の模樣を飾つた茶の輪を染め拔いてある。支那では之を座敷に用ひたものか疑はしいが、かうやつて布團に代用して見ると頗る面

白い。印度の更紗とか、ペルシャの壁掛とか號するものが、一寸間が拔けて居る所に價値がある如く、此花毯もこせつかない所に趣がある。花毯ばかりではない、凡て支那の器具は皆拔けて居る。どうしても馬鹿で氣の長い人種の發明したものとほか取れない。見て居るうちに、ぽおつとする所が尊い。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、さうしてどこ迄も娑婆氣がとれない。先づかう考へながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半ばを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の臀の下に敷かれて居る。老人は頭の毛を悉く拔いて、頰と顎へ移植した樣に、白い髯をむしや〳〵と生やして、茶託へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使をありがたう。わしも、大分御無沙汰をしたから、今日位來て見ようかと思つた所ぢや」と云ふ。此僧は六十近い、丸顏の、達磨を草書に崩した樣な容貌を有してゐる。老人とは平常からの昵懇と見える。

「此方が御客さんかな」

老人は首肯きながら、朱泥の急須から、綠を含む琥珀色の玉液を、二三滴づゝ、茶碗の底へしたゝらす。清い香がかすかに鼻を襲ふ氣分がした。

「こんな田舍に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はあゝ」と何とも蚊とも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云へば、僞りである。淋しからずと云へば、長い說明が入る。

「なんの、和尚さん。此かたは畫を書かれる爲に來られたのぢやから、御忙しい位ぢや」

「おゝ左樣か、それは結構だ。矢張り南宗派かな」

「いゝえ」と今度は答へた。西洋畫だ抔と云つても、此和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋畫ぢや」と老人は、主人役に、又半分引き受けてくれる。

「はゝあ、洋畫か。すると、あの久一さんのやられる樣なものかな。あれは、わし此間始めて見たが、隨分綺麗にかけたなら」

「いえ、詰まらんものです」と若い男が此時漸く口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見て頂いたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、樣子から云

うても、どうも親類らしい。

「なあに、見て頂いたんぢやないですが、鏡が池で寫生して居る所を和尚さんに見附かつたのです」

「ふん、さうか——さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗は頗る大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、繪だか、模樣だか、鬼の面の模樣になりかゝつた所が、一寸見當の附かないものが、べたに描いてある。

「杢兵衞です」と老人が簡單に説明した。

「是は面白い」と余も簡單に賞めた。

「杢兵衞はどうも僞物が多くて、——その絲底を見て御覽なさい。銘があるから」と云ふ。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かさうに寫つて居る。首を曲げて、覗き込むと、杢の字が小さく見える。銘は鑑賞の上に於て、左のみ大切のものとは思はないが、好事者は餘程是が氣にかゝるさうだ。茶碗を下へ置かないで、其儘口へつけた。濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しづく宛落として味はつて見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得て居るが、あれは間違ひだ。舌頭へぽたりと載せて、清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液は殆どない。只馥郁たる匂が食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用ひるは卑しい。水はあまりに輕い。玉露に至つては濃やかなる事、淡水の境を脱して、顎を疲らす程の硬さを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴ふるものあらば、眠らぬも、茶を用ひよと勸めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚くべきものと思ふ。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだ儘、逃れ出づる路を失つた樣な感じである。中には何も盛らぬがいゝ。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちと許り見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好きぢや。時にあなた、西洋畫では襖抔はかけんものかな。かけるなら一つ頼みたいがな」

かいて呉れなら、かゝぬ事もないが、此和尚の氣に入るか入らぬかわからない。折角骨を折つて、西洋畫は駄目だ抔と云はれては、骨の折り榮がない。

「襖には向かないでせう」

「向かんかな。ささな、此間の久一さんの畫の樣ぢや、少し派手過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれは丸でいたづらです」と若い男はしきりに、恥づかしがつて謙遜する。

「その何とか云ふ池はどこにあるんですか」と余は若い男に念の爲尋ねて置く。

「一寸觀海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。——なあに學校に居る時分、習つたから、退屈まぎれに、やつて見た丈です」

「觀海寺と云ふと、わしの居る所ぢや。いゝ所ぢや、海を一目に見下ろしての——まあ逗留中に一寸來て御覽。なに、此所からはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるぢやらうが」

「いつか御邪魔に上がつてもいゝですか」

「あゝいゝとも、何時でも居る。こゝの御嬢さんも、よう、來られる。——御孃さんと云へば今日はお那美さんが見えんやうだが——どうかされたかな、隱居さん」

「どこぞへ出ましたかな。久一、御前の方へ行きはせんかな」

「いゝや、見えません」

「又獨り散歩かな、ハゝゝゝ。お那美さんは中々足が強い。此間法用で礪並迄行つたら、姿見橋の所で——どうも、善く似とると思つたら、お那美さんよ。尻を端折つて、草履を穿いて、和尚さん、何を愚圖々々、どこへ行きなさると、いきなり、驚かされたて、ハゝゝゝ。御前はそんな形姿で、地體どこへ、行つたのぞいと聽くと、今芹摘みに行つた戻りぢや、和尚さん少しやらうかと云うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んで、ハゝゝゝ。御前はそんしを又道具の方へそらした。

「どうも、……」と老人は苦笑ひをしたが、急に立つて「實は是を御覽に入れる積りで」と話老人が紫檀の書架から、恭しく取り下ろした紋緞子の古い袋は、何だか重さうなものである。

「和尚さん、あなたには、御目に懸けた事があつたかな」

「なんぢや、一體」

「硯よ」

「へえ、どんな硯かい」

「山陽の愛藏したと云ふ……」

「いゝえ、そりや未だ見ん」

「春水の替へ蓋がついて……」

「そりや、未だのやうだ。どれ〳〵」
老人は大事さうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。
「い、色合ぢやなう。端溪かい」
「端溪で鴝鵒眼が九つある」
「九つ？」と和尚大いに感じた樣子である。
「是が春水の替へ蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。
「成程。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手ぢやて」
「矢張り杏坪の方がいゝかな」
「山陽が一番まづい樣だ。どうも才子肌で俗氣があつて、一向面白うない」
「ハヽヽヽ。和尚さんは、山陽が嫌ひだから、今日は山陽の幅を懸け替へて置いた」
「ほんに」と和尚さんは後を振り向く。床は平床を鏡の樣にふき込んで、鏘氣を吹いた古銅瓶には、木蘭を二尺の高さに活けてある。軸は底光りのある古錦襴に、裝幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついて居るから、字の巧拙に論なく、紙の色が周

圍のきれ地とよく調和して見える。あの錦襴も織りたては、あれ程のゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて、金絲が沈んで、華麗な所が滅り込んで、澁い所がせり出して、あんない、調子になつたのだと思ふ。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立つて、兩方に突つ張つて居る手前に、例の木蘭がふはりと浮き出されて居る外は、床全體の趣は落ち附き過ぎて寧ろ陰氣である。
「徂徠かな」と和尚が、首を向けた儘云ふ。
「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善からうと思うて」
「それは徂徠の方が遙かにいゝ。享保頃の學者の字はまづくても、何處ぞに品がある」
「廣澤をして日本の能書ならしめば、われは則ち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だつたかな、和尚さん」
「わしは知らん。さう威張る程の字でもないて、ワハヽヽヽ」
「時に和尚さんは、誰を習はれたのかな」
「わしか。禪坊主は本も讀まず、手習もせんから、なう」
「しかし、誰ぞ習はれたらう」
「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりぢや。それでも人に賴まれゝばいつ

でも、書きます。ワハヽヽ。時に其端渓を一つ御見せ」と和尚が催促する。

とう〳〵緞子の袋を取り除ける。一座の視線は悉く硯の上に落ちる。厚さは殆ど二寸に近いから、通例のものの倍はあらう。四寸に六寸の幅も長さも先づ並と云つてよろしい。蓋には、鱗のかたに研きをかけた松の皮を其儘用ひて、上には朱漆で、わからぬ書體が二字許り書いてある。

「此蓋が」と老人が云ふ。「此蓋が、只の蓋ではないので、御覽の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見て居る。然し松の皮の蓋に如何なる因縁があらうと、畫工として余はあまり感服は出來んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云つた。老人はまあと云はぬ許りに手を擧げて、

「只松の蓋と云ふ計りでは、俗でもあるが、是はその何ですよ。山陽が廣島に居つた時に庭に生えて居た松の皮を剝いで山陽が手づから製したのですよ」

成程山陽は俗な男だと思つたから、

「どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れさうなものですな。わざと此鱗のかた抔をびかぴか研ぎ出さなくつても、よささうに思はれますが」と遠慮のない所を云つて退けた。

「ワハヽヽ。左樣よ、此蓋はあまり安つぽい樣だな」と和尚は忽ち余に贊成した。

若い男は氣の毒さうに、老人の顏を見る。老人は少々不機嫌の體に蓋を拂ひのけた。下から愈硯が正體をあらはす。

もし此硯に就いて人の眼を峙つべき特異の點があるとすれば、其表面にあらはれたる匠人の刻である。眞中に袂時計程な丸い肉が、緣とすれ〳〵の高さに彫り殘されて、是を蜘蛛の脊に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各〻鳩鵠眼を抱へて居る。殘る一個は脊の眞中に、黃な汁をしたゝらした如く褒染んで見える。脊と足と緣を殘して餘る部分は幾ど一寸餘の深さに掘り下げてある。墨を湛へる所は、よもや此塹壕の底ではあるまい。たとひ一合の水を注ぐとも此深さを充たすには足らぬ。思ふに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の脊に落としたるを、貴き墨に磨り去るのだらう。夫でなければ、名は硯でも、其實は純然たる文房用の裝飾品に過ぎぬ。

老人は涎の出さうな口をして云ふ。

「此肌合と、此眼を見て下さい」

成程見れば見る程いゝ色だ。寒く潤澤を帶びたる肌の上に、はつと、一息懸けたなら、直ちに凝つて、一朶の雲を起こすだらうと思はれる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云はんより、眼と地の相交はる所が、次第に色を取り替へて、いつ取り替へたか、殆ど吾眼の欺かれるを見出だし得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹の奥に、隱元豆を、透いて見える程の深さに嵌め込んだ樣なものである。眼と云へば一個二個でも大變に珍重される。九個と云つたら、殆ど類はあるまい。しかも其九個が整然と同距離に按排されて、恰も人造のねりものと見違へらるゝに至つては固より天下の逸品を以て許さざるを得ない。

「成程結構です。觀て心持ちがいゝ計りぢやありません。かうして觸つても愉快です」と云ひながら、余は隣の若い男に硯を渡した。

「久一に、そんなものが解るかい」と老人が笑ひながら聞いて見る。久一君は、少々自棄の氣味で、

「分りやしません」と打ち遣つた樣に云ひ放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めて居ては、勿體ないと氣が附いたものか、又取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻した後、とう〳〵之を恭しく禪師に返却した。禪師は篤と掌の上で見澄ました末、夫では飽き足らぬと考へたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の脊へこすりつけて、光澤の出た所を頻りに賞翫して居る。

「隱居さん、どうも此色が實に善いな。使うた事があるかの」

「いゝや、滅多には使ひたうないから、まだ買うたなりぢや」

「さうぢやろ。此樣なのは支那でも珍しからうな、隱居さん」

「左樣」

「わしも一つ欲しいものぢや。何なら久一さんに賴まうか。どうかな、買うて來て御呉れかな」

「へゝゝゝ。硯を見附けないうちに、死んで仕舞ひさうです」

「本當に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日うちに立ちます」

「隱居さん。吉田迄送つて御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合はす所ぢやが、ことによると、もう逢へんかも、知れんから、送つてやらうと思つて居ります」

「伯父さんは送つて呉れんでもいゝです」

若い男は此老人の甥と見える。成程どこか似て居る。

「なあに、送つて貰ふがいゝ。川船で行けば譯はない。なあ隱居さん」

「はい、山越しでは難儀だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辭退もしない。只默つて居る。

「支那の方へ御出でですか」と余は一寸聞いて見た。

「えゝ」

えゝの二字では少し物足らなかつたが、其上掘つて聞く必要もないから控へた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を變へて居る。

「なあに、あなた。矢張り今度の戰爭で——これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は當人に代つて、滿洲の野に日ならず出征すべき此青年の運命を余に語げた。此の夢の樣な詩の樣な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは溫泉のみと思ひ詰めて居たのは間違ひである。現實世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古したる孤村に迄逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何萬分の一かは、此青年の動脈から迸る時が來るかも知れない。此青年の腰に吊る長き劍の先から烟となつて吹くかも知れない。而して其青年は、夢みる事より外に、何等の價値を、人生に認め得ざる一畫工の隣に坐つて居る。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臟の鼓動さへ聞き得る程近くに坐つて居る。其鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮が今既に響いて居るかも知れぬ。運命は卒然として此二人を一堂のうちに會したるのみにて、其他には何事をも語らぬ。

九

「御勉强ですか」と女が云ふ。部屋に歸つた余は、三脚几に縛り附けた、書物の一冊を抽いて讀んで居た。

「御這入りなさい。ちつとも構ひません」

女は遠慮する氣色もなく、つか〳〵と這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいゝ頸の色が、あざやかに、抽き出て居る。女が余の前に坐つた時、此頸と此半襟の對照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、六づかしい事が書いてあるでせうね」

「なあに」

「ぢや何が書いてあるんです」
「さうですね。實はわたしにも、よく分らないんです」
「ホヽヽヽ、それで御勉強なの」
「勉強ぢやありません。只机の上へ、かう開けて、開いた所をいゝ加減に讀んでるんです」
「夫で面白いんですか」
「夫が面白いんです」
「何故？」
「何故つて、小説なんか、さうして讀む方が面白いです」
「餘つ程變つて入らつしやるのね」
「えゝ、些と變つてます」
「初めから讀んぢや、どうして惡いでせう」
「初めから讀まなけりやならないとすると、仕舞ひ迄讀まなけりやならない譯になりませう」
「妙な理窟だ事。仕舞ひ迄讀んだつていゝぢやありませんか」
「無論わるくは、ありませんよ。筋を讀む氣なら、わたしだつて、左樣します」

「筋を讀まなけりや何を讀むんです。筋の外に何か讀むものがありますか」
余は、矢張り女だなと思つた。多少試驗してやる氣になる。
「あなたは小説が好きですか」
「私が？」と句を切つた女は、あとから「さうですねえ」と判然しない返事をした。あまり好きでもなささうだ。
「好きだか、嫌ひだか自分にも解らないんぢやないですか」
「小説なんか讀んだつて、讀まなくつたつて……」と眼中には丸で小説の存在を認めて居ない。
「それぢや、初めから讀んだつて、仕舞ひから讀んだつて、いゝ譯ぢやありませんか。あなたの樣にさう不思議がらないでもいゝでせう」
「だつて、あなたと私とは違ひますもの」
「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試驗をするのは此所だと思つたが、女の眸は少しも動かない。
「ホヽヽヽ解りませんか」
「然し若いうちは隨分御讀みなすつたらう」余は一本道で押し合ふのを已めにして、一寸裏へ

廻つた。

「今でも若い積りですよ。可哀相に」放した鷹はまたそれかゝる。すこしも油斷がならん。

「そんな事が男の前で云へれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「さう云ふあなたも隨分の御年ぢやああありませんか。そんなに年をとつても、矢つ張り、惚れたの、腫れたの、にきびが出來たのつてえ事が面白いんですか」

「えゝ、面白いんです、死ぬ迄面白いんです」

「おやさう。それだから畫工なんぞになれるんですね」

「全くです。畫工だから、小説なんか初めから仕舞ひ迄讀む必要はないんです。けれども、どこを讀んでも面白いのです。あなたと話しをするのも面白い。こゝへ逗留して居るうちは毎日話しをしたい位です。何ならあなたに惚れ込んでもいゝ。さうなると猶面白い。然しいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初めから仕舞ひ迄讀む必要があるんです」

「すると不人情な惚れ方をするのが畫工なんですね」

「不人情ぢやありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で讀むから、筋なんかどうでもいゝんです。かうして、御籤を引くやうに、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と讀んでるのが面白いんです」

「成程面白さうね、ぢや、今あなたが讀んで入らつしやる所を、少し話して頂戴。どんな面白い事が出てくるか伺ひたいから」

「話しちや駄目です。畫だつて話しにしちや一文の價値もなくなるぢやありませんか」

「ホヽ、夫ぢや讀んで下さい」

「英語でですか」

「いゝえ日本語で」

「英語を日本語で讀むのはつらいな」

「いゝぢやありませんか、非人情で」

これも一興だらうと思つたから、余は女の乞に應じて、例の書物をぽつり〳〵と日本語で讀み出した。もし世界に非人情な讀み方があるとすれば正にこれである。聽く女も固より非人情で聽いてゐる。

「情の風が女から吹く。聲から、眼から、肌から吹く。男に扶けられて舳に行く女は、夕暮の

ゞニスを眺むる爲か、扶くる男はわが脈に稻妻の血を走らす爲か。——非人情だから、いゝ加減ですよ。所々脫けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足しなすつても構ひません」

「女は男とならんで舷に倚る。二人の隔りは、風に吹かるゝリボンの幅よりも狹い。女は男と共にゞニスに去らばと云ふ。ゞニスなるドージの殿樓は今、第二の日沒の如く、薄赤く消えて行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔ゞニスを支配した人間の名ですよ。何代つゞいたものですかね。其御殿が今でもゞニスに殘つてるんです」

「それで其男と女と云ふのは誰の事なんでせう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。夫だから面白いのですよ。今迄の關係なんかどうでもいいでさあ。只あなたとわたしの樣に、かう一所に居るところなんで、その場限りで面白味があるでせう」

「そんなものですかね。何だか船の中の樣ですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいゝんです。何故と聞き出すと探偵になつて仕舞ふです」

「ホヽヽぢや聽きますまい」

「普通の小說はみんな探偵が發明したものですよ。非人情な所がないから、些とも趣がない」

「ぢや非人情の續きを伺ひませう。夫から?」

「ゞニスは沈みつゝ、沈みつゝ、只空に引く一抹の淡き線となる。線は切れる。切れて點となる。蛋白石の空のなかに圓き柱が、こゝ、かしこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘樓が沈む。沈んだと女が云ふ。ゞニスを去る女の心は空行く風の如く自由である。去れど隱れたるゞニスは、再び歸らねばならぬ女の心に羈絆の苦しみを與ふ。男と女は暗き灣の方に眼を注ぐ。星は次第に增す。柔らかに搖ぐ海は泡を濺がず。男は女の手を把る。鳴りやまぬ弦を握つた心地である。……」

「あんまり非人情でもない樣ですね」

「なに是が非人情的に聞けるのですよ。然し厭なら少々略しませうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたより猶大丈夫です。——それからと、えゝと、少しく六づかしくなつて來

たな。どうも譯し——いや讀みにくい」

「讀みにくければ、御略しなさい」

「えゝ、いゝ加減にやりませう。——この一夜と女が云ふ。一夜？と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそと云ふ」

「女が云ふんですか、男が云ふんですか」

「男が云ふんですよ。何でも女がエニスへ歸りたくないのでせう。それで男が慰める語なんです。——眞夜中の甲板に帆綱を枕にして横たはりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤の如くに搖れる。男は黒き夜を見上げながら、強ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男は眼を閉づる。——」

「女は？」

「女は路に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ樣である。攫はれて空行く人の如く、只不可思議の千萬無量——あとが一寸讀みにくいですよ。どうも句にならない。——只不可思議の千萬無量——何か動詞はないでせうか」

「動詞なんぞ入るものですか、夫で澤山です」

「え？」

轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顏を見合はす途端に、机の上の一輪插に活けた、椿が、ふら〳〵と搖れる。「地震！」と小聲に叫んだ女は、膝を崩して余の机に靠りかゝる。御互の身軀がすれ〳〵に動く。キヽーと鋭い羽搏きをして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云ふ。

「どこに」と女は崩した、からだを擦り寄せる。余の顏と女の顏が觸れぬ許りに近附く。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさはつた。

「非人情ですよ」と女は忽ち坐住居を正しながら屹と云ふ。

「無論」と言下に余は答へた。

岩の凹みに湛へた春の水が、驚いて、のたり〳〵と鈍く搖いてゐる。地盤の響きに、滿泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、碎けた部分は何所にもない。圓滿に動くと云ふ語があるとすれば、こんな場合に用ひられるのだらう。落ち附いて影を薰してゐた山櫻が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がつたり、くねつたりする。然しどう變化しても矢張り

明かに櫻の姿を保つてゐる所が非常に面白い。

「こいつは愉快だ。綺麗で、變化があつて。かう云ふ風に動かなくつちや面白くない」

「人間もさう云ふ風にさへ動いて居れば、いくら動いても大丈夫ですね」

「非人情でなくつちや、かうは動けませんよ」

「ホヽヽヽ大變非人情が御好きだこと」

「あなただつて嫌ひな方ぢやありますまい。昨日の振袖なんか……」と言ひかけると、

「何か御褒美を頂戴」と女は急に甘える樣に云つた。

「何故です」

「見たいと仰しやつたから、わざ〳〵、見せて上げたんぢやありませんか」

「わたしがですか」

「山越をなさつた畫の先生が、茶店の婆さんにわざ〳〵御頼みになつたさうで御座います」

余は何と答へてよいやら一寸挨拶が出なかつた。女はすかさず、

「そんな忘れつぽい人に、いくら實をつくしても駄目ですわねえ」と嘲る如く、恨むが如く、

又眞向から切りつけるが如く二の矢をついだ。段々旗色がわるくなるが、どこで盛り返したもの

か、一旦機先を制せられると、中々隙を見出だしにくい。

「ぢや昨夕の風呂場も、全く御親切からなんですね」と際どい所を漸く立て直す。

女は默つてゐる。

「どうも濟みません。御禮に何を上げませう」と出來る丈先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかつた。女は何喰はぬ顏で大徹和尙の額を眺めて居る。やがて、

「竹影拂階塵不動」

と口のうちで靜かに讀み了つて、又余の方へ向き直つたが、急に思ひ出した樣に、

「何ですつて」

と、わざと大きな聲で聞いた。その手は喰はない。

「其坊主にさつき逢ひましたよ」と地震に搖れた池の水の樣に圓滿な動き方をして見せる。

「觀海寺の和尙ですか。肥つてるでせう」

「西洋畫で唐紙をかいてくれつて、云ひましたよ。禪坊さんなんてものは隨分譯のわからない

事を云ひますね」

「それだから、あんなに肥れるんでせう」

「それから、もう一人若い人に逢ひましたよ。……」
「久一でせう」
「えゝ久一君です」
「よく御存じです事」
「なに久一君丈知つてるんです。其外には何も知りやしません。口を利くのが嫌ひな人ですね」
「なに、遠慮して居るんです。まだ子供ですから……」
「子供つて、あなたと同じ位ぢやありませんか」
「ホヽヽさうですか。あれは私の従弟ですが、今度戦地へ行くので、暇乞に来たのです」
「こゝに留まつて、ゐるんですか」
「いゝえ、兄の家に居ります」
「ぢや、わざ〳〵御茶を飲みに来た譯ですね」
「御茶より御白湯の方が好きなんですよ。父がよせばいゝのに、呼ぶものですから。麻痺が切れて困つたでせう。私が居れば中途から歸してやつたんですが……」
「あなたは何所へ入らしつたんです。和尚が聞いて居ましたぜ、又一人散歩かつて」
「えゝ鏡が池の方を廻つて來ました」
「その鏡が池へ、わたしも行きたいんだが……」
「行つて御覽なさい」
「畫にかくに好い所ですか」
「身を投げるに好い所です」
「身はまだ中々投げない積りです」
「私は近々投げるかも知れません」
餘りに女としては思ひ切つた冗談だから、余は不圖顏を上げた。女は存外愕かである。
「私が身を投げて浮いて居る所を——苦しんで浮いて居る所を——綺麗な畫にかいて下さい」
「え？」
「驚いた、驚いた、驚いたでせう」
女はすらりと立ち上がる。三歩にして盡くる部屋の入口を出るとき、顧てにこりと笑つた。茫然たる事多時。

十

鏡が池へ來て見る。觀海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのづから鏡が池の周圍となる。池の緣には熊笹が多い。ある所は、左右から生ひ重なつて、殆ど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一應廻つた上でないと見當がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁程よりあるまい。只非常に不規則な形で、所々に岩が自然の儘水際に横たはつて居る。緣の高さも、池の形の名狀し難い樣に、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねて居る。

池をめぐりては雜木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いて居らんのがある。割合に枝の繁まない所は、依然として、うらゝかな春の日を受けて、萌え出でた下草さへある。壺菫の淡き影が、ちらり〳〵と其間に見える。

日本の菫は眠つて居る感じである。「天來の奇想の樣に」と形容した西人の句は到底あてはまるまい。かう思ふ途端に余の足はとまつた。足がとまれば、厭になる迄そこに居る。居られるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ

巡査が追ひ立てる。都會は太平の民を乞食と間違へて、掏摸の親分たる探偵に高い月俸を拂ふ所である。

余は草を茵に太平の尻をそろりと卸した。こゝならば、五六日斯うしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣ひはない。自然の難有い所はこゝにある。いざとなると容赦も未練もない代りには、人に因つて取扱ひをかへる樣な輕薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでも居る。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。自然の德は高く塵界を超越して、絕對の平等觀を無邊際に樹立して居る。天下の羣小を塵いで徒らにタイモンの憤りを招くよりは、蘭を九畹に滋き、蕙を百畦に樹ゑて、獨り其裏に起臥する方が遙かに得策である。世は公平と云ひ無私と云ふ。左程大事なものならば、日に千人の小賊を戮して、滿圃の草花を彼等の屍に培養ふがよからう。

何だか考へが理に落ちて一向つまらなくなつた。こんな中學程度の觀想を練りにわざ〳〵、鏡が池迄來はせぬ。袂から煙草を出して、燐寸をシュッと擦る。手應へはあつたが火は見えない。敷島のさきを附けて吸つてみると、鼻から烟が出た。なるほど、吸つたんだなと漸く氣がついた。燐寸は短かい草のなかで、しばらく雨龍の樣な細い烟を吐いて、すぐ寂滅した。席をずらせて段

段水際迄出て見る。余が茵は天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬと云ふ間際で、とまる。水を覗いて見る。

眼の届く所は左迄深さうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んで居る。余は往生と云ふより外に形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知つて居る。藻の草ならば誘ふ波の情を待つ。百年待つても動きさうもない、水の底に沈められた此水草は、動くべき凡ての姿勢を調へて、朝な夕なに、弄らるゝ期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思ひを莖の先に籠めながら、今に至る迄遂に動き得ずに、又死に切れずに、生きて居るらしい。

余は立ち上がつて、草の中から、手頃の石を二つ拾つて來る。功徳になると思つたから、眼の先へ、一つ抛り込んでやる。ぶく〳〵と泡が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えたと、余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三莖程の長い髪が、慵げに搖れかゝつて居る。見附かつてはと云はぬ許りに、濁つた水が底の方から隱しに來る。南無阿彌陀佛。

今度は思ひ切つて、懸命に眞中へなげる。ぽかんと幽かに音がした。靜かなるものは決して取り合はない。もう抛げる氣も無くなつた。繪の具箱と帽子を置いた儘右手へ廻る。

二間餘りを爪先上りに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて、身體が急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿が咲いて居る。椿の葉は綠が深すぎて、晝見ても、日向で見ても、輕快な感じはない。ことに此椿は岩角を、奥へ二三間遠退いて、花がなければ、何があるか氣のつかない所に森閑として、かたまつてゐる。其花が！　一日勘定しても無論勘定し切れぬ程多い。然し眼が附けば是非勘定したくなる程鮮やかである。唯鮮やかと云ふ計りで、一向陽氣な感じがない。ぱつと燃え立つ樣で、思はず、氣を奪られた、後は何だか凄くなる。あれ程人を欺す花はない。余は深山椿を見る度にいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遲い。向う側の椿が眼に入つた時、余は、えゝ、見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではない。眼を醒ます程の派手やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、只憐れな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、只愛らしい氣持ちがする。椿の沈んで居るのは全く違ふ。黒ずんだ、毒氣のある、恐ろし味を帶びた調子である。此調子を底に持つて、上部はどこ迄も派手に裝つてゐる。然も人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く樣子も見えぬ。ぱつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかゝらぬ山陰に落ち附き拂つて暮らしてゐる。只一眼見たが最後！　見た人は彼女の魔力から金輪際、免るゝ事は出來ない。

あの色は只の赤ではない。屠られたる囚人の血が、自ら人の眼を惹いて、自ら人の心を不快にする如く一種異樣な赤である。

見てゐると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちたらくすると又ぽたり落ちた。あの花は決して散らない。靜かな春に動いたものは只此一輪である。しば枝を離れるときは一度に離れるから、未練のない樣に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。又ぽたり落ちる。あゝやつて落ちてゐるうちに、池の水が赤くなるだらうと考へた。花が靜かに浮いて居る邊りは今でも少々赤い樣な氣がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、區別がつかぬ位靜かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ち盡す幾百輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の後には此古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿の爲に、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の樣に落ちる。又落ちる。ぽたりぽたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いてゐる所をかいたら、どうだらうと思ひながら、元の所へ歸つて、又煙草を呑んで、ぼんやり考へ込む。溫泉場のお那美さんが昨日冗談に云つた言葉が、うねりを

打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子の樣に搖れる。あの顏を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長しなへに落ちて、女が長しなへに水に浮いてゐる感じをあらはしたいが、夫が畫でかけるだらうか。かのラオコーンには——ラオコーン抔はどうでも構はない。原理に背いても、背かなくつても、さう云ふ心持ちさへ出ればいゝ。然し人間を離れないで人間以上の永久と云ふ感じを出すのは容易な事ではない。第一顏に困る。あの顏を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つては凡てを打ち壞して仕舞ふ。と云うて無暗に氣樂では猶困る。一層ほかの顏にしては、どうだらう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思はしくない。矢張りお那美さんの顏が一番似合ふ樣だ。然し何だか物足らない。物足らないと迄は氣が附くが、どこが物足らないかが、吾ながら不明である。從つて自己の想像でいゝ加減に作り易へる譯に行かない。あれに嫉妬を加へたら、どうだらう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎惡はどうだらう。憎惡は烈し過ぎる。怒？怒では全然調和を破る。恨？恨でも春恨とか云ふ、詩的のものならば格別、只の恨では餘り俗である。色々に考へた末、仕舞ひに漸くこれだと氣が附いた。多くある情緒のうちで、憐れと云ふ字のあるのを忘れて居た。憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。お那美さんの表情のうちには此の憐れの念が

少しもあらはれて居らぬ。そこで物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが畫は成就するであらう。然し――何時それが見られるか解らない。あの女の顔に普段充滿して居るものは、人を馬鹿にする微笑と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみである。あれ丈では、とても物にならない。

がさり〳〵と足音がする。胸裏の圖案は三分二で崩れた。見ると、筒袖を着た男が、脊へ薪を載せて、熊笹のなかを觀海寺の方へわたつてくる。隣の山からおりて來たのだらう。

「よい御天氣で」と手拭をとつて挨拶する。腰を屈める途端に、三尺帶に落とした鉈の刃がぴかりと光つた。四十恰好の逞しい男である。どこかで見た樣だ。男は舊知の樣に馴々しい。

「旦那も畫を御描きなさるか」余の繪の具箱は開けてあつた。

「あゝ。此池でも畫かうと思つて來て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降られなさつて、嘸御困りで御座んしたろ」

「え？うん御前はあの時の馬子さんだね」

「はあい。かうやつて薪を切つては城下へ持つて出ます」と源兵衞は荷を卸して、其上へ腰をかける。煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は燐寸を借してやる。

「あんな所を毎日越すなあ大變だね」

「なあに、馴れてゐますから――夫に毎日は越しません。三日に一返、ことによると四日目位になります」

「四日に一返でも御免だ」

「アハヽヽヽ。馬が不憫ですから四日目位にして置きます」

「そりやあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハヽヽヽ」

「それ程でもないんで……」

「時に此池は餘程古いもんだね。全體何時頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？どの位昔から？」

「なんでも餘つ程古い昔から」

「餘つ程古い昔からか。成程」

「なんでも昔、志保田の孃樣が、身を投げた時分からありますよ」

「志保田つて、あの温泉場のかい」

「はあい」
「御嬢さんが身を投げたつて、現に達者で居るぢやないか」
「いんにえ。あの嬢さまぢやない。ずつと昔の嬢様が」
「ずつと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」
「なんでも、餘程昔の嬢様で……」
「その昔の嬢様が、どうして又身を投げたんだい」
「その嬢様は、矢張り今の嬢様の様に美しい嬢様であつたさうながな、旦那様」
「うん」
「すると、ある日、一人の梵論字が來て……」
「梵論字と云ふと虚無僧の事かい」
「はあい。あの尺八を吹く梵論字の事で御座んす。其梵論字が志保田の庄屋へ逗留して居るうちに、その美しい嬢様が、其梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしても一所になりたいと云うて、泣きました」
「泣きました。ふうん」

「所が庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は聟にはならんと云うて、とう〳〵追ひ出しました」
「其虚無僧をかい」
「はあい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてこゝ迄來て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて——とう〳〵、えらい騒ぎになりました。其時何でも一枚の鏡を持つてゐたとか申し傳へて居りますよ。夫で此池を今でも鏡が池と申しまする」
「へえゝ。おや、もう身を投げたものがあるんだね」
「まことに怪しからん事で御座んす」
「何代位前の事かい、それは」
「なんでも餘つ程昔の事で御座んすさうな。夫から——これはこゝ限りの話しだが、旦那さん」
「何だい」
「あの志保田の家には、代々氣狂が出來ます」
「へえゝ」
「全く祟りで御座んす。今の嬢様も、近頃は少し變だ云うて、皆が囁します」

「ハヽヽヽそんな事はなからう」
「御座んせんかな。然しあの御袋様が矢張り少し變でな」
「うちにゐるのかい」
「いゝえ、去年亡くなりました」
「ふん」と余は煙草の吸殻から細い烟の立つのを見て、口を閉ぢた。源兵衞は薪を脊にして去る。

畫をかきに來て、こんな事を考へたり、こんな話を聽く計りでは、何日かゝつても一枚も出來つこない。折角繪の具箱迄持ち出した以上、今日は義理にも下繪をとつて行かう。幸ひ、向う側の景色は、あれなりで略纏まつてゐる。あすこでも申し譯に一寸描かう。

一丈餘りの蒼黒い岩が、眞直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲がる角に、嵯々と構へる右側には、例の熊笹が斷崖の上から水際迄、一寸の隙間なく叢生してゐる。上には三抱へ程の大きな松が、若蔦にからまれた幹を、斜に捩つて、半分以上水の面へ乘り出してゐる。鏡を懷にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだらう。

三脚几に尻を据ゑて、畫面に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、偖て水は

どこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中迄茂り込んで居るかと怪しまるゝ位、鮮やかに水底迄寫つてゐる。松に至つては空に聳ゆる高さが、見上げらるゝ丈、影も亦頗る細長い。眼に寫つた丈の寸法では到底收りがつかない。一層の事、實物をやめて影丈描くのも一興だらう。水をかいて、水の中の影をかいて、さうして、是が畫だと人に見せたら驚くだらう。然し只驚かせる丈では詰まらない。成程畫になつて居ると驚かせなければ詰まらない。どう工夫をしたものだらうと、一心に池の面を見詰める。

奇體なもので、影丈眺めて居ては一向畫にならん。實物と見比べて工夫がして見度くなる。余は水面から眸を轉じて、そろり〳〵と上の方へ視線を移して行く。一丈の巖を、影の先から、水際の繼目迄眺めて、繼目から次第に水の上に出る。潤澤の氣合から、皺皺の模樣を逐一吟味して漸々と登つて行く。やうやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂に達したるとき、余は蛇に睨まれた蟇の如く、はたりと畫筆を取り落とした。

綠の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、嫣然として織り出されたる女の顏は、――花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚かしたる女の顏である。

余が視線は、蒼白き女の顔の眞中にぐさと釘附けにされたぎり動かない。女もしなやかなる體軀を伸せる丈伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立つて居る。此一刹那！

余は覺えず飛び上つた。女はひらりと身をひねる。帶の間に椿の花の如く赤いものが、ちらつ いたと思つたら、既に向うへ飛び下りた。夕日は樹梢を掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊笹は愈〻青い。

又驚かされた。

十一

山里の廬に乘じてそゞろ歩く。觀海寺の石段を登りながら仰ぎ數春星一二三と云ふ句を得た。余は別に和尙に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出でて足の向く所に任せてぶら〳〵するうち、つい此石磴の下に出た。しばらく不許葷酒入山門と云ふ石を撫でて立つて居たが、急にうれしくなつて、登り出したのである。

トリストラム・シャンデーと云ふ書物のなかに、此書物ほど神の覺召に叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとは只管に神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見當が附かぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。從つて責任は著者にはないさうだ。余が散歩も亦此流儀を汲んだ、無責任の散歩である。只神を賴まぬ丈が一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時に之を在天の神に嫁した。引き受けて吳れる神を持たぬ余は遂に之を泥溝の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位なら、すぐ引き返す。一段登つて佇むと き何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、又登る。かくして、余はとう〳〵、上迄登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものを、ぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、矢張りこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門內から、黃な法衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が銳い聲で何處へ御出でなさると問うた。余は只境內を拜見にと答へて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんぞと言ひ捨てて、すた〳〵下りて行つた。あまり洒落だから、

余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を振り立て振り立て、遂に姿を杉の木の間に隱した。其間かつて一度も振り返つた事はない。成程禪僧は面白い。きび〳〵して居るなと、のつそり山門を這入つて、見ると、廣い庫裏も本堂も、がらんとして、人影は丸でない。余は其時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからと云ふ譯ではない。禪のぜの字も未だに知らぬ。只あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

世の中はしつこい、毒々〳〵しい、こせ〳〵した、其上ずう〳〵しい、いやな奴で埋まつてゐる。元來何しに世の中へ面を曝して居るんだか、解しかねる奴さへゐる。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのを以て、左も名譽の如く心得てゐる。五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁の勘定をして、それが人世だと思つてる。さうして人の前へ出て來て、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教へる。前へ出て云ふなら、それも參考にして、やらんでもないが、後の方から、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云ふ。よせと云へば益〳〵云ふ。分つたと云つても、屁をいくつ、ひつた、ひつたと云ふ。さうして夫が處世の方針だと云ふ。方針は人々勝手である。只ひつた、ひつたと云はずに默つて方針を立てるがいゝ。人の邪魔になる方針は差し控へるのが禮儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云ふなら、こつちも屁をひるのを以て、こつちの方針とする計りだ。さうなつたら日本も運の盡さだらう。

かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに、あるいてるのは實際高尙だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ない所に方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。是が眞正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正當防禦の方針で、かうやつて觀海寺の石段を登るのは隨緣放曠の方針である。

仰數春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる時、朧にひかる春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絕句は纏める氣にならなくなつた。卽座に已めにする方針を立てる。

石を甃んで庫裏に通ずる一筋道の右側は、岡つゝじの生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽かに光る。數萬の甍に、數萬の月が落ちた樣だと見上げる。何所やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも住んで居るらしい。氣の所爲か、廂のあたりに白い

ものが、點々見える。糞かも知れぬ。

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一列に竝んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じから云ふと、岩佐又兵衞のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて、踊を踊つてゐる姿である。本堂の端から端迄、一列に行儀よく竝んで踊つて居る。其影が又本堂の端から端迄一列に行儀よく竝んで踊つて居る。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も、奉加帳も打ちすてて、誘ひ合はせるや否や、此山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると大きな覇王樹である。高さは七八尺もあらう、絲瓜程な青い黄瓜を、杓子の樣に壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと繼ぎ合はせた樣に見える。あの杓子がいくつ繼がつたら、御仕舞ひになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて、屋根瓦の上迄出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意に、どこからか出て來て、ぴしやりと飛び附くに違ひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなる樣には思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。如何なる是佛と問はれて、庭前の柏樹子と答へた僧があるよしだが、もし同樣の問に接した場合には、余は一も二もなく、月下の覇王樹と應へるであらう。

少時、晁補之と云ふ人の紀行文を讀んで、未だに諳誦して居る句がある。「時に九月天高く露清く、山空しく、月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たま〳〵人の上にあるが如し。窓間の竹數十竿、相摩戞して聲切々已まず。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立笑髯の狀の如し。二三子相顧み、魄動いて寐ぬるを得ず。遲明皆去る」と又口の內で繰り返して見て、思はず笑つた。此覇王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追ひ下げたであらう。刺に手を觸れて見ると、いら〳〵と指をさす。

石甃を行き盡して左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。殆ど一抱へもあらう。高さは庫裏の屋根を拔いて居る。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝があゝ重なると、下から空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂す程の細い枝を徒らには張らぬ。花さへ明かである。此の遙かなる下から見上げても一輪の花は、はつきりと一輪に見える。其一輪がどこ迄簇がつて、どこ迄咲いて居るか分らぬ。それにも關はらず一輪は遂に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。徒らに白いのは寒過ぎる。專らに白いのは、ことさらに人の眼を奪ふ

巧みが見える。木蓮の色は夫ではない。極度の白さをわざと避けて、あたゝかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下して居る。余は石甃の上に立つて、此のおとなしい花が累々とどこ迄も空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然として居た。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花計りなる空を瞻る

と云ふ句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合うて居る。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盗人は居らぬ國と見える。狗は固より吠えぬ。

「御免」

と訪問れる。森として返事がない。

「頼む」

と案内を乞ふ。鳩の聲がくう〳〵と聞こえる。

「頼みまあゝす」と大きな聲を出す。

「おゝゝゝ」と遙かの向うで答へたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向う側にさした。小坊主がひよこりとあらはれる。了念であつた。

「和尚さんは御出でかい」

「居られる。何しに御座つた」

「溫泉に居る畫工が來たと、取次いで御呉れ」

「畫工さんか。それぢや御上がり」

「斷らないでもいゝのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい畫工さんぢやな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃へなさい。そらこゝを御覽」と紙燭を差しつける。黒い柱の眞中に、土間から五尺許りの高さを見計らつて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。

「そおら。讀めたろ。脚下を見よ、と書いてあるが」

「成程」と余は自分の下駄を丁寧に揃へる。

和尚の室は廊下を鍵の手に曲がつて、本堂の横手にある。障子を恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばつた了念が、

「あのう、志保田から、畫工さんが來られました」と云ふ。甚だ恐縮の體である。余は一寸可笑しくなつた。

「左樣か、是へ」

余は了念と入れ代る。室は頗る狹い。中に圍爐裏を切つて、鐵瓶が鳴る。和尚は向う側に書見をして居た。

「さあ是へ」と眼鏡をはづして、書物を傍へおしやる。

「了念。りようゝねえゝん」

「はあゝゝい」

「座布團を上げんか」

「はあゝゝゝい」と了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、來られた。嘸退屈だろ」

「あまり月がいゝから、ぶら〳〵來ました」

「いゝ月ぢやな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本の外には何もない、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に朧夜の海が忽ちに開ける。急に氣が大きくなつた樣な心持ちである。漁火がこゝ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空に入つて、星に化ける積りだらう。

「是はいゝ景色。和尚さん、障子をしめて居るのは勿體ないぢやありませんか」

「左樣よ。しかし毎晩見て居るからな」

「何晩見てもいゝですよ、此景色は。私なら寐ずに見て居ます」

「ハゝゝゝ。尤もあなたは畫工だから、わしとは少し違ふて」

「和尚さんだつて、うつくしいと思つてるうちは畫工でさあ」

「なる程それもさうぢやろ。わしも達磨の畫位は是で、書くがの。そら、こゝに掛けてある、此軸は先代がかかれたのぢやが、中々〳〵ようかいとる」

成程達磨の畫が小さい床に掛かつてゐる。然し畫としては頗るまづいものだ。只俗氣がない。拙を藪はうと力めて居る所が一つもない。無邪氣な畫だ。此先代もやはり此畫の樣な構はない人であつたんだらう。

「無邪氣な畫ですね」

「わし等のかく畫はそれで澤山ぢや。氣象さへあらはれて居れば……」
「上手で俗氣があるのより、いゝです」
「ハヽヽヽまあ、さうでも、賞めて置いてもらはう。時に近頃は畫工にも博士があるかの」
「畫工の博士はありませんよ」
「あ、左樣か。此間、何でも博士に一人逢うた」
「へえゝ」
「博士と云ふとえらいものぢやろな」
「えゝ。えらいんでせう」
「畫工にも博士がありさうなものぢやがな。なぜ無いだらう」
「さういへば、和尙さんの方にも博士がなけりやならないでせう」
「ハヽヽヽまあ、そんなものかな。——何とか云ふ人ぢやつたて、此間逢うた人は——どこぞに名刺がある筈だが……」
「どこで御逢ひです、東京ですか」
「いやこゝで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云ふものが出來たさうぢやが、一

寸乘つて見たい樣な氣がする」
「つまらんものですよ。やかましくつて」
「さうかな。蜀犬日に吠え、吳牛月に喘ぐと云ふから、わしの樣な田舍者は、却て困るかも知れんてなう」
「困りやしませんがね。つまらんですよ」
「左樣かな」
鐵瓶の口から烟が盛に出る。和尙は茶簞笥から茶器を取り出して、茶を注いでくれる。
「番茶を一つ御上がり。志保田の隱居さんの樣な甘い茶ぢやない」
「いえ結構です」
「あなたは、さうやつて、方々あるく樣に見受けるが矢張り畫をかく爲かの」
「えゝ。道具丈は持つてあるきますが、畫はかかないでも構はないんです」
「はあ、それぢや遊び半分かの」
「さうですね。さう云つても善いでせう。屁の勘定をされるのが、いやですからね」
流石の禪僧も、此語丈は解しかねたと見える。

「屁の勘定た何かな」

「東京に永く居ると屁の勘定をされますよ」

「どうして」

「ハヽヽヽ、勘定丈ならいゝですが。人の屁を分析して、臀の穴が三角だの、四角だのつて餘計な事をやりますよ」

「はあ、矢張り衞生の方かな」

「衞生ぢやありません。探偵の方です」

「探偵？成程、それぢや警察ぢやの。一體警察の、巡査のて、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「さうですね、畫工には入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になつた事がない」

「さうでせう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてゝ、構はんがな。澄まして居たら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察ぢやて、どうもなるまいがな」

「屁位で、どうかされちや堪りません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云はれた。人間は日本橋の眞中に臟腑をさらけ出して、恥づかしくない樣にしなければ修業を積んだとは云はれんてな。あなたもそれ迄修業をしたらよかろ。旅抔はせんでも濟む樣になる」

「畫工になり濟ませば、いつでもさうなれます」

「それぢや畫工になり濟ましたらよかろ」

「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」

「ハヽヽヽ。それ御覽。あの、あなたの泊まつて居る、志保田のお那美さんも、嫁に行つて歸つてきてから、どうも色々な事が氣になつてならん、ならんと云うて仕舞ひにとう〳〵、わしの所へ法を問ひに來たぢやて。所が近頃は大分出來てきて、そら、御覽。あの樣な譯のわかつた女になつたぢやて」

「へえゝ、どうも只の女ぢやないと思ひました」

「いや中々機鋒の鋭い女で——わしの所へ修業に來て居た泰安と云ふ若僧も、あの女の爲に、ふとした事から大事を窮明せんならん因緣に逢着して——今によい智識になるやうぢや」

靜かな庭に、松の影が落ちる。遠くの海は、空の光に應ふるが如く、應へざるが如く、有耶無耶のうちに微かなる、耀きを放つ。漁火は明滅す。

「あの松の影を御覽」

「綺麗ですな」

「只綺麗かな」

「えゝ」

「綺麗な上に、風が吹いても苦にしない」

茶碗に餘つた澁茶を飮み干して、絲底を上に、茶託へ伏せて、立ち上がる。

「門迄送つてあげよう。りようゝねえゝん。御客が御歸りだぞよ」

送られて、庫裏を出ると、鳩がくうゝ〳〵と鳴く。

「鳩程可愛いものはない、わしが手をたゝくと、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月は愈〳〵明るい。しん〳〵として、木蓮は幾朶の雲華を空裏に擎げて居る。沉寥たる春夜の眞中に、和尙ははたと掌を拍つ。聲は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りさうなものぢやが」

了念は余の顏を見て、一寸笑つた。和尙は鳩の眼が夜でも見えると思うて居るらしい。氣樂なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返ると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石甃の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

十二

基督は最高度に藝術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー・ワイルドの說と記憶してゐる。基督は知らず。觀海寺の和尙の如きは、正しく此資格を有して居ると思ふ。趣味があると云ふ意味ではない。時勢に通じてゐると云ふ譯でもない。彼は畫と云ふ名の殆ど下すべからざる達磨の幅を掛けて、よう出來た抔と得意である。彼は畫工に博士があるものと心得て居る。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思つて居る。それにも關はらず、藝術家の資格があると云ふ。彼の心は底のない囊の樣に行き拔けである。何も停滯して居らん。隨處に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈澱する氣色がない。もし彼の腦裏に一點の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行屎走尿の際にも、完全たる藝術家として存在し得るだらう。余の如きは、探偵